にも迅速御下附無之ゐは甚以不都合千萬と奉存候

今日申上置候民會草稿拙宅までにゐも急に御送與相願候

縣治條例中民會ゑ一條終に相加へらるゝにもせよ凡昨日までゑ處にゐ御一定に相成候はゝ太政大臣殿よりゑ御示書一同御下附相成度此段態と申上置候

（太政大臣は三條實美）

先は爲其取急草々頓首

六月廿七日　孝允

尙々吳々も議案ゑ處は差急候に付御含可被下候以上

（博文は伊藤博文）

博文　樣御内々

一三二　伊藤博文宛書翰　明治八年六月廿七日

昨日は御光來奉謝候さて今日は道路議案を以附會議可申と相考申候此議案に付候ゐは別に結局手間取候事とも被相考不申候然處民會議案も已に於政府も御評決相濟候邊も段々漏承いたし候議案は時日相かゝり候事と各員も想像いたし可成丈迅速御下附に相成候樣願出候ものも頻々に御坐候頓に地方へも御示相成居候事にゐ何歟政府上にも有意にゐ此議案御下附遷延と申樣相響候ゐは却ゐ不面白相考申候今日印書局副長ゐ相尋見候處一旦御下けに相成又々調所ゑ方ゐ差戻し候都合に相成候と申居申候彌御一決に相成居候事に御坐候はゝ今日にも印書局へ御下け相願申候無左ゐは手持無沙汰にゐ困却仕候事出來可致と相考へ申候

元來此議案は於政府も徐々と御評議に相成候方愚見にゐは可然と相考警察議案と一同於政府最初御評議ゑ節右ゑ趣發言仕見候得共御高案にゐも不可とゑ御事に付民會議案も御評決に至り候次第今日に至り候ゐは勢余り遷延候は不可然と奉存候

僕も兎角繁劇にゐ民會議案も未得と一見不得致御手元に不用ゑ御草稿御坐候はゝ御廻し相願申候

御巡幸一條も時機を以早々御内話之御運に御盡力可然と奉存候尤元老院開院之後に候得は旁可然歟とも愚考仕候其邊は丸に御熟慮之上可然御配慮萬禱仕候先は爲其草々頓首

六月廿七日九字三十分

於地方會院誌

尚々於政府御評決に相成候議案丈けは順々印書局へ御下け相願申候民會草按は御都合相成候得ば御廻し精々御願仕候以上

孝　允

博　文　樣御内披

（博文は伊藤博文）

一三三　伊藤博文宛書翰

明治八年六月廿八日

亂筆高恕別紙乍御手數井上へ御とゝけ奉願候

（井上は井上馨）

朶雲拜見仕候彌御清安引つゝき御配意と奉存候議案類は大抵落手民會之分昨夜一讀仕候に末少々難解處も有之折角船越に出席相乞ひ置申候得共

（船越は船越衛）

とふも不得寸暇于今得と相談し候事も出來不申候民會之議案に過日緒言御坐候處此度御廻しに相成不申必竟板垣論も緒言之處を以過る廿四日相まとめ置候事に付たんまりにゝ御取除に相成候ゝは後日必議論出來候事無疑と相考へ申候　傍聽連云々少々入耳候事も御坐候此事にはとふもとこ歟に深意有之候樣被相察申候兎角政府之方略も附人後候樣之氣味御坐候間到底之見込に至り候ゝは遺憾不少何卒今後は只管小事より先大事之永年に關係いたし候事之着目御一定に至りかしと萬企望仕候

元老院一條は如何相成候哉

御巡幸之一條も決定に至り候へは少しも速なる方よろしくと逐々宮内よりも被相迫申候御都合相分り候はゝ御示奉願候先は爲其草々頓首

六月廿八日

孝　允

博　文　殿御内披

（博文は伊藤博文）

一三四　吉富簡一宛書翰

明治八年六月廿八日

亂筆御推讀可被下候

彌御清安大賀々々先達來兩度朶雲御投與實に々々繁劇にゐつひ々々御無沙汰申候井上（井上は井上馨）に一條も先路に目的は相立大安心いたし候得共誠に手間のかゝり候には困却いたし申候眞に馬鹿々々しき事にゐ腹がくさり申候さて先日井上より御賴申傳へ候由弟も尻が明きた譯にゐも無之宗像（宗像は宗像直二郎）を目的に數度候事に付周旋いたし申候實にいつも々々々其末は御面倒をかけ候事に付なんとも一言無御坐何分よろしく御賴仕升と申出候ばかりとふぞ可然御配意吳々御賴仕候其事に付別紙を別に出し置申候

此度地方官に會議に付議長被申付斷り候も無本意と引受け候處實に々々此頃は汗水日々一斗位出申候御遠察可被下候中野（中野は中野梧一）も日々出院なり曾ゐ御預け申置候品物必々幸便には御送り可被下候左なくては約束も水泡なり袋は不圖延引調次第御送り申升

御家内樣へよろしく來島其外へも同斷御願申候其中御用心第一に奉存候

草々頓首

六月廿八日晩

別帋は調置打忘れ申候

簡一　兄御内披御火中々々　孝允

（簡一は吉富簡一）

一三五　井上馨宛書翰　明治八年七月四日

昨日御答書拜見仕候何卒小室一條御聞合可被遣候傍聽人を阿州邸へ集め民權をとると歟うばうとか（以下欠文）（小室は小室信夫）（阿州邸は蜂須賀茂韶邸）

眞に人民ゐ適應に處を以誘導候樣にとの御主意に候處右等に事も有之候ゐは肝要なる有司に主意と申ものも不相分また縣令等も煽動され或は傍聽人などの見へに不適實に言を主張候ときは實に上は

天皇陛下に罪人下は則人民どもに罪人にゐ實に可惡ものと相考へ申候于

（三吉は三吉周亮）（鳥山は鳥山重信）（梶山は梶山鼎介）

時長府ゟ三吉鳥山などゝ申もの（三吉は鳥取縣令鳥山は三重縣參事）隱然民權論に荷擔候ゟ騷き候よし先日三吉弟ゟ意見を聞候樣ゟ事御坐候へ共返復され候ゟは大變に付不當不障公平至正ゟ返答いたし置申候何卒梶山にゟも御招被成只々老兄ゟ御含を以ひどく三吉鳥山二人ゟ梶山よりにゟも致論破候樣御指令有之候はゝ重疊と奉存候實に今日會場へ臨み地方官などは行政ゟ一人にゟ數百十ゟ人民を天皇陛下より御委托被成誠に重任に御坐候處其輕薄不心實には驚入候工合も不少是は往々中央にも注意無之ゟは不相濟事と奉存候先は不取敢三吉鳥山ゟ事に付内々至急入御耳置度如此に御坐候草々頓首

七月四日　　老　伴

（玄は井上馨）

玄　老兄御内密

一三六　伊藤博文宛書翰　明治八年七月四日

朶雲拜誦此上はいたし方無之乍去民會議案等も處々改り候に付ゟは政府上ゟ處は得と御論定無之ゟは後にゟ不都合出來候ゟは不宜何も其余は拜青と申縮候草々頓首

七月四日　　孝　允

（博文は伊藤博文）

博　文　樣御内答

一三七　伊藤博文宛書翰　明治八年七月六日

朶雲拜見今朝御尋仕候一條早速大臣公へ御往復御裏書ゟ趣了承安堵仕候彼是御配意ゟ段奉謝候草々頓首

七月六日　　孝　允

（大臣公は三條實美）

博　文　殿御答

（博文は伊藤博文）

一三八　伊藤博文宛書翰　明治八年七月八日

今日之議會は則回向院之七日目と申處にゐ議會以來之はれなる事に御坐候處終に區戸長會議に相決し申候乍去前途之處は毎々御談申候通屹度御豫算無之ゐは不相成事と奉存候草々頓首

七月八日

一兩日は實に骨か折れ申候

博　文　樣御内々

孝　允

（博文は伊藤博文）

一三九　伊藤博文宛書翰　明治八年七月八日カ

昨日於元老院御相談可仕と相考失念致し候に付則左に其件相認候間御高按之處御示可被下候

一　明日は都合により民會之議案附衆議可申と相考候處小區村町會之議一般一定之法則を設け候事現場難相叶事に御坐候間地方々之任適宜候と御内決之譯に御坐候に付ゐは其主意は初發に僕より辨明いたし置候ときは一體之都合大に可然と相考へ申候たとへ辨明不致とも必此質問は相起り候事と無疑相考申候に付願はくは先辨候得は今後之料理にも損益之關し候事可有之と致想像候如何御考被下候哉

博　文　樣御内々

孝　允

（博文は伊藤博文）

一四〇　伊藤博文宛書翰　明治八年七月九日

昨日一書差出候處御一覽被下候哉此度區戸長にゐ一決候に付ゐは前途之料理又御豫定無之ゐは不相濟付ゐは至急御相談もいたし置度然處少しも寸暇無之何卒御差繰被下候へは別ゐ仕合依ゐ此段得貴意申候草々頓首

七月九日

尚々井上一條に付小畑云々之事司法省より正院へ申出候事御坐候由此事早急御沙汰無之ゐは不都合と申事に御坐候何卒早々御運願處に御坐候以上

（井上は井上馨）
（小畑は小畑美稻カ）

博　文　様御内密　　孝　允

（博文は伊藤博文）

一四一　吉田右一宛書翰　明治八年七月九日

爾後彌御清安大賀此事に御坐候さては曾ゐ御内話申置候通授産局一條に付代理御依頼申度則別帋差出申候間御承諾可被下候且又先頃井上も奉職之由風聞御坐候ゐ兼ゐ御諾に相成居候資本金之内も御催促御坐候由當人へ御談しに相成候上は當人之引受候事に付元より其始抹等は嚴重に所致無之ゐは不相濟事に御坐候間決ゐ御掛念無之樣にと存候もし又此後にゐも井上奉職候都合に至り候はゝ其々之分段相立不申ゐは御安心難相成邊も御坐候得は其節御相談被下候へは分明に御答可仕候此段御了承被下候東京之近況は逐々歸縣之人も引つゞき候に付諸氏より御承知可被下候先は爲其草々頓首

七月九日　　孝　允

（井上は井上馨）

（右一は吉田右一）

右　一　樣御内披

一四二　伊藤博文宛書翰　明治八年七月十日

今朝御話申候通一般之人氣政府へ之向背にも相かゝはり候に付草々其筋より御詮議有之度奉存候草々頓首

七月十日　　孝　允

博　文　殿

（博文は伊藤博文）

一四三　吉富簡一宛書翰　明治八年七月十二日

亂筆御推讀可被下候乍御手數宗像山内へ之書狀御屆け御頼申候

頃日御投與之朶雲拜見いたし候先以御平安珍重々々さて段々御忠告萬謝此事に御坐候弟も決ゐ通例ならは周旋もいたし不申候得共宗像も同意にゐ決ゐ迷惑はいたさせぬとの事に御坐候間此證人を目的に無余儀心配い

（山内は山内久三郎）

（宗像は宗像直二郎）

たし三井より口入いたし申候三井へは弟之所有金友人之分と合ゟ五千圓預け有之何も弟之分を貸渡候と申譯にゟは無御坐只其金と弟之宅などを引當之積りにして心配いたし候仕合此譯は中々筆頭にゟ難盡乍然いつでも色々とつゞまる所は掛御面倒何とも恐縮是に付候ゟは申樣無御坐候利合之事も三井へ談し候處馬關之規則も有之に付馬關之第一安利之分にいたし候樣可申遣との事に御坐候尚山内方へも御示之通早々可申越樣可致候先は不取敢御答まで如此に御坐候其中別ゟ御自愛第一に御坐候草々頓首

（三井は三井商會）

（平原は平原平右衛門）
（息子は平原太作）
（豚兒は木戸正次郎）

七月十二日

尚々平原如きものは世にも珍らしきと相考候處如御忠告中々世間油斷は不相成已後は用心可致平原之息子も於英國豚兒之名前を以千圓余之借財いたし親子して於内外相苦しめ實に困却此事に御坐候如此例しも隨分世に稀なる事と相考へ申候

東京も都合無事弟は此節會議之一條にゟ地獄へ陷り候心地御想察可被下候やれ々々世之中も不面白あき果申候兎角一般人民之事と思ひ不知々々はまり込强く跡にゟ困迫いたし候事不限此度日々知りながら自病にゟいたし方無之已後は工夫可致と相考へ申候

浪華之近況如何何卒休暇を得候はゝ京攝へなりとも一遊いたし欝散仕度乍去また色々之惡計を想像候へは身の毛もよだち候氣味に御坐候草々

山田へも少しも甘言は無之い細は藤田覺助も承知いたし居申候

樂水　兄御内々

糸米

（山田は山田顯義）
（樂水は吉富簡一）

一四四　伊藤博文宛書翰　明治八年七月十四日

亂筆御推覽可被下候且又此書狀は御答御裏書被下御返與相願申候

昨夜御内話申置候町村會漸々於各縣相開候に付候ゟは彼大目之ケ條と於

朝廷漸次正則を以地方ゟ進歩に隨ひ御開かせ被成候御主意（朝廷には其適度ゟ可準據處無之に付先地方官を招集御下問相成候處區戸長會に相決候に付ゟは議院ゟ決議を以此度此法則をも御垂問相成候得共正則を以町村より漸次進昇候事は地方ゟ適宜に任せ着手ゟ邊も御示有之候に付ゟは實に朝廷ゟ確然たる條理も明白にゟ御主意も明瞭に相分候事に付此等ゟ處も屹度御示被爲在候方可然と奉存候）是迄已に官民混淆ゟ分又は民選而已にゟ相開候分は厚く御熟案ゟ上適應ゟ御處分相成候樣に奉存候尚昨夜御内話申置候件々得と御考味奉願候草々頓首

七月十四日　　孝　允

博　文　樣内密御直

（博文は伊藤博文）

一四五　伊藤博文宛書翰

明治八年七月十五日

亂筆高恕御火中々々

今朝一書相呈候定ゟ御覽被下候事と奉存候別紙船越竹井持參昨夕ゟ御樣子も承知仕候付ゟは此儘檢印仕候ゟ御廻申候に付早々御運奉祈候

別紙地方官へ御示し相成候に付ゟは御主意も大略御示無之ゟは不相成

（船越は船越衛）
（竹井は武井守正）

事と奉存候草案後に差出可申候御參考ゟ一端に相成候得は重疊と奉存候

今日福地ゟ話澁澤に昨日緩々相談候處澁澤も大奮發にゟ兼ゟ同人とも杞憂するところゟ主意を以民會取立候決心と相考へ申候元より政府ゟ目的と不相違候得は無此上候得共折角奮發いたし候ゟ政府ゟ目的と齟齬有之候ゟは不面白候間得と世外にゟも御話し置目的ゟ不相違樣御主意有之度奉存候先は爲其差急草々頓首

七月十五日　　孝　允

尚々新聞ゟ事は無御失念樣に奉存候以上

博　文　樣御内密

（福地は福地源一郎）
（澁澤は澁澤榮一）
（博文は伊藤博文）

一四六　伊藤博文宛書翰

明治八年七月十五日

亂筆御推讀直に御火中可被下候

（山口範は山口範藏）

今朝山口範來訪元老院之事も爲前途深憂候邊も有之誠に適實之次第と甚
感心いたし申候元老院中之事も一々御了知無之ゐは自然と必不都合も生
し可申御了知に相成居候ゐ未論中に御料理有之候得は自ら何も未萠に處
致候譯にゐ御都合と相考へ申候山口範ともにゐも貴殿は如何御考に相成
居候哉同人ともゝ先年御一同米行候頃は貴殿は實にラジカルと内心存込
候と相考候事も有之申候然し範は正直ものに付貴殿も此節は爲前途には
深く御心配に付無腹臓相談じ呉候樣申談置申候何卒得と範より元老中之
内情も不絶御探偵に相成居御駈引有之度奉存候付ゐは至急範へは御面談
被成候方今日之事に付大に御都合も可有之と奉存候に付不取敢申上候元
老中へも政府之バーチーは是非々々多數に相成候樣御方略第一と奉存候
範之杞憂仕候處は實に御大事と奉存候
新聞之方も早急御着手に相成候樣司法へ御下命奉願候先は爲其草々頓首

七月十五日　九段

（赤羽は赤羽根にて伊藤博文）

赤羽樣極々内密御直披

一四七　伊藤博文宛書翰

明治八年七月十六日

亂筆高恕

今日は炎氣尤甚敷御坐候處御起居如何定ゐ明日は御出席と相考申候地方
官解散に付候ゐは伺候ものへ御示令又不伺とも御示令可相成ものは速に
御運御願仕候無左ゐ預催促逃辭も無之困窮此事に御坐候
前途政府上目途之處も兼ゐ御内話仕候通此儘にゐは終に瓦解は必然と奉
存候何卒斷然分離相つき候樣御盡力無之ゐは不相成事と奉存候元より僕
も力限りは相働可申候得共不被行候は實にいたし方無御坐候に付御同樣
に目的一定候はゝ決心にゐ取かゝり度ものに御坐候大久翁もとふそ何卒
全體に着眼いたし呉られ候得は無此上此邊は卿之御盡力御配意に無之ゐ
は難相運と實に虛力にゐ愚考仕候草々頓首

（大久保は大久保利通）

七月十六日

二白縣治條例も終に今以御渡し無之是非一兩日に御渡し相成候樣御願申候此度之會議にゐ增加候事はあとより御加入相成候ゐ不差閊事と奉存候吳々も無御失念御願申候以上

博　文　樣御內密　　孝　允

（博文は伊藤博文）

一四八　陸奥宗光宛書翰　明治八年七月十九日

（井上は井上馨）

朶雲拜見仕候先以御淸適奉賀候今夕御光來之由被仰聞候處今日四字過より有約精養軒へ罷越候に付態々御光來被成下駈違候ゐは不相濟候間二三字頃に井上方まで出掛可申と奉存候間御立寄被下候得は拜靑可仕候弟も昨夜來下痢服痛にゐ難儀仕候へ共今日は押ゐ外出不仕ゐは不相成事も御座候に付是非罷越可仕と奉存候草々拜復

七月十九日曉

（宗光は陸奥宗光）

宗　光　老　兄御內々　　孝　允

一四九　木梨信一宛書翰　明治八年七月十九日

爾後彌御平安奉賀候近來兎角繁務にゐ意外御無沙汰申上候定ゐ縣內も御靜謐と御察仕候東京も別に相變り候事無御坐此度會議之議長相勤候には隨分弱り申候尤且々に相濟候間御放意可被下候尙近況は追々歸縣之人より御承知可被下候さて又先達ゐ御探問に預り候事件其後邪推仕候ゐ事實御探索之上一おどし被成候御內意歟と相窺其中には何歟相分り可申と奉存候處少しは右等之說も入耳仕候へ共是こそと申候證跡も相擧り不申付ゐは伏罪之外いたし方無之もの歟とも相考へ申候彌其次第に御坐候へはいつれへ歟可申越と奉存候に付其節御算用可仕候先は御無音仕候に付御尋旁奉呈候其中時下御自愛第一に存候草々頓首

七月十九日

尚々御滿堂樣へも可然御致意奉願候拜

松菊

梨花老兄

乍失敬別符御序に御屆け奉願候

（梨花は木梨信一）

（井上は井上馨）

一五〇　吉田右一宛書翰　明治八年七月十九日

爾後彌御清安大賀此事に御座候さては曾て御内話申置候通授產局一條に付代理御依頼申度則別紙差出申候間御承諾可被下候且又先頃井上も奉職之由風聞御座候て兼て御議に相成居候資本金之内も御催促御座候由當人へ御諾しに相成候上は當人之引受候事に付元より其始抹等は嚴重に所致無之て は不相濟事に御座候間決て御懸念無之樣にと存申候もし又此後にて も井上奉職候都合に至り候はゝ其々之段相立不申て は御安心難相成邊も御座候へは其節御相談被下候へは分明に御答可仕候此段御了承可被下候東京之近説は逐々歸縣之人も引つゝき候に付諸氏より御承知可被下候先は爲其草々頓首

七月十九日　孝允

右一樣御内披

（右一は吉田右一）

一五一　吉田右一宛書翰　明治八年七月

山口縣授產局之儀先般拙子奉職候に付て は今後管理難相屆就て は貴殿代理御擔任相成度候尤緊要之事に關渉し難相決儀も有之候はゝ其時は御相談可承且又資本金增植開墾着手等之儀井上馨へ御協議相成可然候此段得貴意如此候也

明治八年七月　木戸孝允

吉田右一殿

一五二　木梨信一宛書翰　明治八年七月十九日

亂筆高恕

先以御清適奉賀候過日來色々御面倒之儀御願仕盡御運被遣難有奉存候

○諫早福原云々い細承知仕候尤福原は已に御免に相成諫早は謹慎中に御座候處御聞及之次第にも無御座候樣子他よりも段々聞合せ見申候萩城之光景も可憐次第不少乍去逐々に方向も相定り可申歟と奉存候却て吏人などにも諫早等を厭ひ候ものも有之歟之風聞此事は過日野素も弟へ申置候何卒何事も可成丈用にたゝぬ黨はこしらへぬ樣いたし度ものと奉存候野素之話は御含までに申上置候同人も慥かに承知候よしに御座候

（諫早は諫早作次郎）（福原は福原又市）（野素は野村素介）

○三浦事も始は諫早などへも直に弟面會出來兼候次第も有之候間同人を以事により候と說得も可致と相考へ京都より連れかへり申候且又脫隊等之内情も分り可申と存候然處弟も此度之一條に付あれこれと少々入費も相かゝり終には福原諫早も少々は助け不申て不相成樣相成兩人迄へも貸與いたし申候于時防長之處は弟等故鄕にも有之何卒往々一人も方向を不誤其業に安し候樣いたし度と付て は於東京も同志中出金いたし折々は一人つゝにて も歸縣候都合等も野村素等始相謀り居候よし此度三浦も一應歸京候都合に相決し申候付て は路費丈けにて も福原諫早之關係を以立被下候都合には參り申間敷哉左候へは弟も仕合申候眞之内々老兄まで申上試候事に付無御容赦奉願候もし出來不申候へは萬代屋にて取替置せ可申と奉存候弟もあれこれにて迷惑仕候間乍心外申上試候次第に付左樣御承知奉願候

（三浦は三浦芳介）

三浦萩へ參り居候て若ものへも情實相通し候氣も有之且は脫隊ともまちゞゝ之工合も相分り仕合候事も不少候

中野も一兩日中には歸縣と奉存候兼て願置候事よろしく奉願候先は爲其草々頓首

（中野は中野梧一）

七月十九日　允

梨花老兄御内密

（七月は或は八月カ）（梨花は木梨信一）

一五三　三條實美宛書翰

明治八年七月廿日

亂筆高恕奉仰候再拜

尊書奉敬誦候島津一條實に御苦慮被遊候段何とも恐縮之至に奉存候孝允も不快にゐ避客仕居候處元より至急之御用に御坐候得ばいか樣とも相働可申之處實に此儀甚困難にゐいか樣勘考仕候ゐも容易に可然則案も無御坐去とて不得止島津奉命相成候とも則日より元老院中紛紜相生じ候ゐは是又不容易儀にゐ益至于此候ゐは（島津は島津久光）

朝威も地に落候次第に御坐候間得と此處は乍恐御案慮被爲在卒爾に御所分被爲遊且御進退等之事被仰出候ゐも不相濟尙其中篤と愚按をも盡し見可申何卒兩三日中は御不快之譯を以御引籠被爲在候ゐは如何哉と奉存候如此儀を申上候は誠に以恐縮之極に奉存候得共重大之儀にゐいかゝ申上候ゐ可然哉於則案一向目的相立不申去とて前申上候如輕卒之御所分に相成益困難相殘候ゐも國家にとり候ゐは五十歩百歩寸益も無御坐候間不得止不顧恐御引籠云々申上候明日御會議も被爲在候はゝ御床上にゐ御會議被遊諸氏之見込をも御聽置被遊候ゐ可然と奉存候已に會議之事も諸氏へ御傳被遊候上は御病床なり御會議被爲在候ゐ可然と奉存候御會議相濟候處にゐ諸氏之見込をも相窺可申候何分にも此事輕卒に御所致被爲在候ゐ引つゞき直樣困難相生し候ゐは實以不容易儀と奉存候に付苦憂之餘申上候間此段不惡樣御了納奉仰候恐々頓首九拜

七月廿日

尙々明日御會議之節都合を以御辭表御決心之邊も被仰聞候ゐ可然歟と奉存候乍去此儀到底不得止之處より被仰出候儀に付得と御都合御見計らひ被遊條理上におゐて眞に如何とも難致邊より無據斯く々々之主意と御相談被遊候方幾應にも可然と奉存候

政治上之儀に付實に如此混雜少しも爲國にも爲人民にも不相成左候ゐ

廟堂上之苦心不容易隨而萬機之凝滯とも相成從來之一惡風と奉存候後來は目的無之事は餘り料理に過きぬ方却而於孝允萬全と奉存候敬白

内密奉復　　孝允

（此書は宛名を闕く明治八年三條實美に致せるものなり）

一五四　伊藤博文宛書翰　明治八年七月廿日

亂筆御推讀是願候

彌御清適奉賀候昨日井上陸奥より（井上は井上馨）（陸奥は陸奥宗光）も入々承り候處林勇藏（林勇藏は林有造）は何卒速に御登用有之候方可然と奉存候（地方官へ御用に而地方を煽動候而民撰論に而も暴に主張候樣に而は不都合に付縣令に候得は縣により申候諸省中に候へはいつれに而も可然歟と奉存候尤縣と申候而も一縣に而他へ響き候ほとの事も有之間敷歟と奉存候）左大臣（左大臣は島津久光）公は是非元老（條公は三條實美）は御見合之御都合可然と奉存候條公へも此段別に申上候御含置可被下候于今下痢相治り不申候に付今日は出勤不得仕候先は爲其草々頓首

七月廿日　　九段

（赤羽は伊藤博文）

赤羽　樣御内密

一五五　青木周藏宛書翰　明治八年七月廿日

亂筆御推覽被下御火中是願申候

先以御清安に御奉職奉賀候逐々朶雲御投與被下候處兎角取紛大に御無沙汰に打過申候本邦も都合靜謐に御座候得共ぐづ々々彼是之議論は不少何分にも政府之目的一定之上は一色にして到底相貫候樣有之度希望候得共情實と歟何と歟種々之都合有之何事も如思不被行遺憾千萬に御座候元より弟は抑壓專制も當今日決而不相好去とて急進いたし候而前後を不顧は無策之極に而雷同いたし候事出來不申確乎たる漸進を以相遂け度見込も政府上時々漸進中に急進を生し急進中退歩を生し一派之不動了簡と申もの乏敷候而困却千萬に御座候去月來地方官之開院有之議長を被命些迷惑に御座候得共地方官も昨年來之行かゝりも有之紛紜之末に付辭し候譯に

も參り兼奉命候ゟ且々遂其節申候兎角世の中蚋（カ）だの蚊だのにいぢめられ候と速に其防禦いたし候へ共却ゟぢんきよ病歟何歟不起之病を釀し候は不省氣味不少國家之事も亦然歎息も不得止不致ゟは不相成候是非とも一締りいたし不申ゟは無覺束第一に會計之事などは尤懸念昨年已來耗失も不容易大も會計之不續を以辭職と歟申內情も有之候よしに薄々漏聞いたし申候薄々漏聞と申も分らぬ事ながら本邦之有樣兼ゟ御察し之通り何卒愚按には井上を出し隨ゟ彼之一派を出し候はゝ一維持可相成歟とも存じ申候好ものありいとうものあり乍去同人も先年とは違ひ思慮も一層加倍し可申同人出して大に可然と弟は爲其周旋可然と存込居申候

（井上は井上馨）

唐太之事被仰越候處是は先年老西どもの說にゟ丸に唐太を渡す論など歐洲留守中に盛に相成終に今日之處に至り候は能く出來事た位之事に御坐候付ゟは魯人などに被見込候事も有之開拓などの失策も不容易候地所之事被申越弟之分は今日にゟは半途之處にゟ少し年月を不經候ゟは全弟之私有に歸し不申候大地を御望み被成候得は今日より小金邊へ御着手に相成候得は隨分大地も御入手に可相成と存申候先は積る御返答旁如此に御座候其中時下御自愛專一に奉存候草々頓首

七月廿日　　松菊

青蛇老兄

（青蛇は青木周藏）

近來朝鮮論有之申候朝鮮人ども近頃日本人が西洋服を着し候故きらひと歟申候樣子堪笑事にゟ愚も如此に至り候ゟはいたし方無之然し高くは申され升せぬ十年前を御覽じろ々々々々とふ文明になる歟も知れませぬ

一五六　中井弘宛書翰

明治八年七月廿日

亂筆御推覽可被下候

爾後御清安大賀々々過日來度々朶雲御投與折柄日々多務にゟ一日々々と

御答も遷延失敬之段御容赦可被下候曾而御詩作をも御示し出たらめに當時御睡眠如何之御次韻もいたし度と奉存候得共何分不得寸暇殘念千萬に御坐候本邦之景況に付候而も色々御高按御示被下候處實に可歎は人々各々少々之考按も有之隨而其所見も異同御坐候得共眞之如歐洲黨派に至り候出來不申其元因は人々之智見品位之不相進處にも有之候歟昨日急進之徒も一身之都合により今日は漸道を唱へ今朝漸進之說を主張候輩も一身之不平より明朝は急進を煽動いたし候樣之類比に有之實に純粹愛國之士未知在呵弟にも別に是こそと申說も無之候得共外債日に加わり國產未繁兵威未足責外國之非法兵器船艦未能自製學校敎育未及歐州之萬一人智も隨而卑屈是亦不得止次第にも政府之一新も未滿八年其故弟之淺見にも は生ぎゝに散財いたし國土人民之利益に無之事を好而戰を求し等は當然之處にも萬々不好事に御坐候乍去事我國に切迫し一人引道十夫が非禮等之場合にも有之候歟又は凡其條理を盡し公論之歸する所を以擧事候は不得止之事に御坐候へ共一人之都合を以し一人之不平を以成すは元より弟之雷同不致處にも弟は則無庇之一黨に御坐候一黨と申候へは多人數之樣に御坐候へ共顧ると弟一人歟も難計候○于時當年は地方官之議院を開き不圖も弟議長を被命甚當惑いたし申候乍去去年紛紜も有之候末承知仕候間辭退仕候譯にも參り不申

一芝居やらかし申候且々無事に相濟み申候兎角何事も一歩より千里之道も始ると申心得に歸し候へはよろしく御坐候へ共素人どもが最初から輕氣球やエキスプレース之瀛車にもやらかし掛中途にも如何とも難致等之事不少是は爲其人爲人民甚不幸福と相考へ申候○薩摩も靜謐之よし乍去本邦は薩摩や長州等之靜謐と申も役人どもの靜謐と申も引當には一向相成不申嗚呼只々切迫に相考へれは財貨之濫出どう歟趣向無之而は不相成一般に相望候ものは敎育を不誤人々漸次に進歩候樣にとの事而已に御坐候人民は三千三百餘萬御坐候得共過半は犬や馬の用にも相立ぬもの計り

にゐは實にいたし方無之何卒一人にゐも眞之人にいたし度と只管希望仕候先は乍延引御一答申上度如此に御坐候其中時下御自愛第一に奉存候草々頓首

七月廿日

孝　允

弘　兄

（鈴木は鈴木金藏）

尙々實に兄達之御消日を想像候へは羨敷候ゐ腹か立申候御地は如何當節は炎熱も日々九十四度位に御坐候鈴木氏へも可然御傳言奉願候豚兒なども色々世話に相成候由に御坐候

（弘は中井弘）

一五七　伊藤博文宛書翰　明治八年七月廿一日

（島は島津久光）（條公は三條實美）

亂筆御推覽可被下候右大臣大審院長官云々は如何相成候哉

先以御清適奉賀候さては島老議長論にゐ條公も不容易御配慮之よし僕は今日不快にゐ參邸不致候處御集會も御坐候由終に如何御決定に相成可然哉之諸參議は御見込に御坐候哉何卒御洩らし可被下候條公よりも今日朶雲御示に候得共決末之處相成り不申候實に年々歳々有司之進退論にゐ紛紜を生し少しも國土人民上之利害は如別物何とも遺憾千萬に御坐候先は爲其草々頓首

七月廿一日

赤　羽　樣御內密

（赤羽は伊藤博文）

九　段

一五八　伊藤博文宛書翰　明治八年七月廿一日

（條公は三條實美）

一昨日來下痢之氣味にゐ避客罷在條公より御一書到來得と樣子不相分候に付折角別紙罷出御樣子可相窺と奉存候處留守へ御光來被下候由にゐ朶雲御示早速持せ候に付不取敢拜見仕候然處御書中に板垣は餘り宜敷も有之間敷と申內意に被相窺云々大木も同論と歟板垣之余り宜敷も有之間敷と申內意と申事一向其意味不能得解尙又御尋申上候條公よりも又々朶雲

（板垣は板垣退助）（大木は大木喬任）

御示に付披見仕候處余程御迫り又々一昨年之第二之芝居之如き事御坐候
ゟは甚以不面白何と歟速に御處致御坐候方可然と奉存候御見込は如何に
御坐候哉明日工部省まて七字過頃まてに罷出候ゟもよろしく御都合相成
候はゝ其節御高按も承り可申候其中分り候處丈けは御一答奉願候草々頓
首

七月廿一日　　孝　允

尙々條公も余程御迫り之趣に御坐候以上

芳　梅　様御内々

（芳梅は伊藤博文）

一五九　槇村正直宛書翰

明治八年七月廿四日

亂筆高恕

此品は乍輕少御持歸り被下候へゟは難有奉存候荆婦よりも宜敷申上
呉々様申出候

先以御清適奉賀候一昨日は匆卒中にゟ甚失敬相働申候御容赦可被下候彌
明日は御出立に可有之烏渡御尋可仕之處昨今彼是取紛居申候間御無沙汰
仕候炎熱中別ゟ御自愛專一に奉存候先は爲其草々頓首

七月廿四日

尙々乍毫末御滿家様ゟ可然御致意可被下候尙國重谷口山本佐畑其外へ
も御傳言可然御願仕候且又毎々御多務中恐縮仕候へ共地所之儀小僧之
儀金瓶之儀圖面は一昨日御手元へ出し置候様之ものにゟよろしく尤藏六之考にゟ尙
恰好は工夫仕呉候ゟよろしく御座候大さは凡三合餘り入にゟ可然と奉存
候其中大小之金物等取集め差出可申候凡三合余入に　陳存周錫之湯沸是は葉山堂より相求め申候
ゟ量目いかほどゝ申事相分り候へは大に仕合申候
若眞物に無之候へは戻し約束に御座候問一應乍御手數藏六へ御見せ被遊十分之品に無
御座候はゝ葉山堂へ共上にゟ御返し可被遣候直段は五十圓にゟ御座候實に葉山堂には
耳のもげ候花瓶を六十圓にゟ賣付られ掛商賣とは乍申油　北條へ可然御禮御傳言
斷相成不申候乍御邪魔御持せ仕候間御取歸り可被遣候
御願申候且炭入之代價之處御尋被遣候ゟ是非御拂置奉願候先は御願ま
て草々

十八眞老兄御内々　　松　菊

（國重は國重正文）
（谷口は谷口起孝）
（山本は山本格馬）
（佐畑は佐畑信之）
（北條は北條太兵衛）
（十八眞は槇村正直）

一六〇　伊藤博文宛書翰　明治八年七月廿五日

政府上之處尚御細案是祈候

（井上は井上馨）

林有造一條井上へ御相談被成候ゟは如何御沙汰有之候上にゟ自然奉命不致ゟは不都合と存申候何卒阿州之縣令も被免候方可然實に現時之不都合も不少よしに承知いたし申候過日會議之時之模樣にゟも迂遠之說而已吐露所詮此往管理候事は六ケ敷と被相考申候只今まて見合居候得とも大久保不勤付ゟは御逢御坐候はゝ神田孝平云々尚御噺被下候樣御願仕候草々

（阿州縣令は名東縣權令古賀定雄）

（大久保は大久保利通）

頓首

七月廿五日

允

尚々本文御失念なく御願申候拜

（博は伊藤博文）

博　兄極內密御獨拆

一六一　尾崎三良宛書翰　明治八年七月廿五日

亂筆高恕御火中々々

爾後御清適大賀此事に御座候さては華族元老院へ撰擧之向も何分不評判にゟ壬生などは始終眠りて居候樣子段々被責寄僕も申譯無之候昨日は町村會之準則衆議有之候由之處之フリーに相決し只不動產所持之ものは撰擧被選とも皆出來候由順序なしに如此相成候ゟは實に歎息之至に御坐候壬生其外御傳手之有之候向へは些御忠告奉祈候先は爲其草々頓首

（壬生は壬生基修）

七月廿五日

尚々新聞條例も先今日之處にゟは不被行ものと相成候哉弟も今日始ゟ出勤仕候處一同不參に付樣子も一向相分り不申御省之省論と申ものはいかゝ之都合に御座候哉御洩らし可被下候草々

三　良　老　兄內密御直

孝　允

（三良は尾崎三良）

一六二　尾崎三良宛書翰　明治八年七月廿五日

昨日は態々御答書御示尚今日も朝來紛紜之事件有之奔走仕御答も不得仕失敬之段御容赦奉願候今日は只今より大久保へ廻り候ゟ歸家仕候都合に御坐候處少々前約も有之折角御光來之節取込居候ゟも殘念に奉存候間明日正院へ御參有之候ゟ其節御約束仕置可申候もしも正院へ御參無之候はゝ内務省へ一書差出し可申候間御樣子明日御聞せ可被遣候御願申候先は爲其草々頓首

（大久保は大久保利通）

七月廿五日三條殿におゐて認　孝允

三良老兄御答

（三良は尾崎三良）

一六三　井上馨宛書翰　明治八年七月廿五日

朶雲拜見仕候昨日は早速御光來奉萬謝候取紛失敬而已相働申候如仰來る廿八日には必參堂可仕候實は來客續々には困却千萬眞之御答まて草々頓首

七月廿五日　眞之　世外老兄拜復　今尚　半世外

（世外は井上馨）

一六四　尾崎三良宛書翰　明治八年七月廿七日

今日御願仕置候儀乍御面倒御一揮早々御願仕候于時地方官會議之掛先達ゟ御内話申置候通數人相定め置定日に集會候ゟ各地方より會議に關係候事務取扱且は來年會議之節規則增補等之儀現地經驗之事は談合も相成居候方往々之都合可然と奉存候何卒是等之事も御案し置被下候樣御願仕候先は爲其草々頓首

七月廿七日

尚々明日にゟも正院に御參相成候はゝ拜青仕度奉存候以上

三良老兄御内披　孝允

（三良は尾崎三良）

一六五　尾崎三良宛書翰　明治八年七月廿八日

朶雲拜見仕候彌御清安大賀此事に御座候御願仕置候一事早々御廻難有奉存候尚熟見可仕申候愚考には願はくは政府へ先出し度樣にも相考へ申候尚拜青御相談をも可仕候于時昨日於高輪華族ゟ少年連に面會仕候何卒得と御考按ゟ邊も拜承屹度一塊をなし國家ゟ有用物に養成仕度と奉存候是又拜青得と御相談仕度奉存候草々頓首

七月廿八日　允

尚々昨今は色々難事出來甚困却いたし申候以上

（三は尾崎三良）

（大久保は大久保利通）

一六六　三條實美宛書翰　明治八年七月廿九日

三　兄　内密御答

亂筆高恕奉仰候亂上馨ゟ儀大久保へ御談被爲在候哉奉窺度候拜白

拜呈過刻尊書御示ゟ趣於大久保宅盡精議候處二策ゟ内御親諭被爲遊候方可然と申處いつれも同論付ゐは御親諭ゟ次第條理明白に無之ゐは甚以不都合千萬に御坐候間此處精々十一分に大臣公御盡力不被爲在ゐは徹上も亦徹下も不仕候に付深く此處は御注意奉萬禱候尚い細は明日拜謁可申上候恐々頓首九拜

七月廿九日　孝允

尚々板垣へも其際に兼ゐ言上仕置候處ケ樣々々ゟ　思食と申處を被仰聞候方可然と奉存候拜白

（大臣公は三條實美）

（板垣は板垣退助）

密　呈

（此書は宛名を闕く明治八年三條實美に致せるものなり）

一六七　尾崎三良宛書翰　明治八年七月廿九日

今日御相談可仕と相考御尋仕候處最早御退院にゐ不及是非何卒其中御參院に御坐候はゝ鳥渡御尋被下候樣御願申候御相談ゟ件は地方官會議ゟ書

記官等各々所分に付ゐは其御用懸り等ゟ一條に御座候何卒來會まで事務其外ゟ氣脉も不絶樣いたし置度左候得は爲來會至極都合歟と相考申候先は爲其草々頓首

七月廿九日　　木孝

尾三老兄御内披

（尾三は尾崎三良）

一六八　井上馨宛書翰　明治八年七月三十日

亂筆御推覽後必御火中々々々

御宅及狐、及先收と御尋申候得共いづれにゐ好夢を御結び被成居候哉一向御樣子不相分于時頑翁一條は昨日御噺申候處に內情一決然處此一段は眞ゟ御親論と申處に無之ゐは不都合也然るに頑翁へ洩漏候ゐは卽時に不治且又其際に當り又種々別論も出來（急に引分け等ゟ事）候ゐは事ゟ成就不仕中に破れ候は必然に付只々條先生ゟ見込にゐ根本ゐ得と申込被置候ゐゟ所分に相成候都合にゐ尤秘事なり其で何も其都合にいたし置候處昨日小室歸り掛古澤へ一書相投じ頑翁不能防鮫洲へ行と歟申手帋を差越古澤直に板垣へ參り尋ね候處一向不知と相答へ陸奥へ又古澤より申越陸奥よりあはたゞ敷又弟へ申越候に付弟よりゟ返答其等ゟ事は一向不承過日來ゟ行がゝり千折萬曲いたし居候に付筆頭にゐは難申盡又齟齬候ゐ種々ゟ疑惑世間へ渉り候ゐは不宜候に付面上ゟ上可相談と申候處今日罷越候に付弟もどふなるもの歟不相分定ゐ條先生ゟ所分可有之位に申置候付ゐは昨日小室來訪ゟ時ゟ談も弟等而已ゟ見込にゐケ樣々々いたすと申譯にゐも無之此上はいたし方有之間敷と申歎息談位ゟ事にゐ其末は昨日來申上候一條に相決し候都合に御座候間此邊厚く御含置被下小室へも其都合に奉願候又板もぐず々々申候ゐは面倒至極也弟も實に昨日熱中に終日奔走然るに又間から兎や角さわぎ是でも不治と今一層委敷御談し可申置と方々御尋申其末此手帋を認め候も隨分えらく且又內に居り或は人から少しつゞ承知候

（尾三は尾崎三良）
（頑翁は島津久光）
（條先生は三條實美）
（小室は小室信夫）
（古澤は古澤滋）
（板垣は板垣退助）
（陸奥は陸奥宗光）

ゐは又やゝ間敷申相談すればがくやにゐ破れ候樣ゝ氣味も不少吳々も此邊ゝ處御含被下前より相認候主意にゐ御願申候先は爲其草々頓首

七月卅日

尙々別に御談じ申度一兩日に御尋可仕候本文ゝ事は間違わぬ樣に奉願候以上

今　玄　老　兄極々密々御獨披　　老　伴

（今玄は井上馨）

一六九　井上馨宛書翰　明治八年七月カ

亂筆御推覽御火中々々々

先以御清安奉賀候終に弟も腦病相發一昨夜は甚苦み申候今日は少し快候間出勤可仕と奉存候乍去昨夜も安眠難出來隨分困苦御降察可被下候于時逐々縣令どもより承知仕候へは去月廿六日廿七日板垣宅へ縣令ども段々相招き其席には小室も居合候由左候ゐ餘程民權論を煽動仕候よし實に不審千萬狐狸ゝ世の中歟とも怪み申候元來天皇陛下ゝ思食は決ゐ人民ゝ進歩を被爲厭候儀は無之事は申までも無御坐候得共有司どもゝ忠正適實ゝ心を以（以下欠）

（板垣は板垣退助）（小室は小室信夫）

玄　老　兄內密御直披　　老　伴

（玄は井上馨）

一七〇　井上馨宛書翰　明治八年七八月頃

（前文缺）差上け（以下六七字位缺損）

於浪華先收社相渡し吳候樣御傳聲御願仕候居所は大坂下寺町御藏跡南へ入植木屋にゐ福井平兵衞と申ものゝ處に居申候いづれ取りに人差出し候樣可申遣候町中は空氣が惡敷と申候ゐ近來寺町へ轉居仕候

○昨日は半途に御噺し申候通實に弟も不愉快千萬近年一日にゐも聊樂み候ゐ靜に消日仕候事無之先達ゐより所詮目的は無之其上不快にも有之候

（大久保は大久保利通）
（板垣は板垣退助）
（島津は島津久光）

間先鞭之方可然と存詰自然あとに相成候ゟは決ゟ六つケ敷と相考大久保板垣にも十分吐露陳述決心仕候處又島津がどふと歟何と歟申事にゟ決ゟ島津位弟不居とも格別は無之と百方相論し候へどもとふし論しこまれ案の如く下敷と相成こゝろならさる事に日々從事いたし只々血涙（以下缺損）

（此書は前後缺損せるも明治八年七八月の頃木戸孝允が井上馨に贈れるものなり）

一七一　伊藤博文宛書翰　明治八年八月一日

亂筆高恕

（條公は三條實美）
（頑翁は島津久光）
（板垣は板垣退助）

御手紙拜見仕別紙慥に落手直に條公へ御返可申候如貴論頑翁一條も一先落着よし乍然平和ては萬々難相繼事と被存申候頑翁之爲に謀り候ゟも到底退身か上策なり官之爲には固よりと奉存候○板垣論之處も取捨何と歟御決定に相成候方可然弟も中間に立候事最早難出來再勤候事百萬之後悔何とも不堪仕合に御坐候板之說之如く容易に今日之事被行候ものにも無之又大久始之考之如く大藏も內務も此儘にゟ目的も有之間敷識者之不憂ものも痴者は憂ふ智者之不苦ものも愚者は苦むと申諺之如く僕等無識淺慮無益之憂苦而已一向前途之目的も無之其日々々と消過候仕合終に耻にも面目にも不係逃遁候外いたし方も有之間敷と深く心配仕候御憐察可被下候前原板垣面會云々眞僞如何と存申候探偵者之未盡義には無之歟とも相考へ申候前原之處も催促候に付何と歟御決着に相成度奉存候○世外之身上と申ものはいかゝなるものに候哉とふそ參議にゟも御登庸相成候得は重疊と奉存候先は其爲草々頓首

（大久は大久保利通）
（前原は前原一誠）

八月一日　　孝允

博文　樣內々御答

（博文は伊藤博文）

一七二　尾崎三良宛書翰　明治八年八月七日

亂筆高恕御一覽必御火中々々

今朝は御光來奉謝候其節御内話申置候一條可然御願申候實に々々可浩歎は政府之目的一轍一致を以相貫候と申事甚以六つヶ敷兎角寄合所帶たるを不免生等も眞に再勤せし無識淺慮何故不加官員中一目的を冥々に助け候ゟ我義務を不盡りしやと不堪後悔候一政府中にゟも己而已之引受けに無之事は如見他國依ゟ爲前途にも實に杞憂いたし申候付ゟは司法卿ゟ出し候分御添削被下候はゝ別紙を司法卿へ出し候と申候ゟ大臣公へ一書差出候分何卒冥々に前文之主意を十分含蓄候少しは政府一致之目的を貫き法津之可重も人々了承候樣御誘導無之ゟは不相濟と申邊も御運筆可被下候願わくは御用間に早き方を御願申升嗚呼浩歎々々々々拜白

（司法卿は是時大木喬任）
（大臣公は三條實美）

八月七日

尙々又一日緩々御噺仕度先日來氣分不平常其故兎角御無沙汰仕候以上

尾三老兄　　木孝

（尾三は尾崎三良）

極密御直披
必御火中可被下候

一七三　大久保利通宛書翰

明治八年八月十七日

亂筆高恕

先以御清適奉大賀候さては過日御内決相成候正院分離論今度御着手相成候に付ゟは責任權限人配彼是適當不仕ゟは只形膚上之事而已に渉り事務便運之得失におゐて利益無之而已ならず忽凝滯を生じ候樣之義有之候ゟは甚以不面白付ゟは篤と御高慮之邊も相窺置度一昨日其邊御約束申上置度と奉存候處御參院無之弟も爾後持病に被惱引籠居申候得共前途を想像仕候得は甚難安いづれにも一方向に相定り候上は心志も決着仕候得共半途之境にゟ只々迷亂仕候までに御坐候爲其今夕卒然推ゟ參上仕候處御外出中に付大意申上置候尙後日拜青緩々御窺仕度奉存候草々頓首再拜

八月十七日　　孝允

甲東　盟臺御内拝

（甲東は大久保利通）

一七四　尾崎三良宛書翰　明治八年八月廿日

亂筆高恕

爾後先以御清適奉賀候近頃駈違御遠々敷打過申候さては來る廿二日華族連ゟ招にゟ毛利元德よりも申越精養軒ゟ參會仕候都合に及返答置申候イ藤博文ゟ事も加筆有之申候間同人へも申通し彼も陪席いたし候由老兄には元より御參會と奉存候定ゟ此參會は食事までにゟ別に妙も有之間敷乍去折節は集會候ゟ食事等もいたし四方ゟ談を盡し候も必無益にゟは無之事と愚考仕候得共元來華族ゟ今少し振起仕候處ゟ根本に好手段有之度と弟も頻に盡愚按見候得共どふも妙趣向も無之去とて打捨置候得は尚更瓦解可致過日御談話ゟ末も有之御高按も拜承可致と奉存候處終に炎熱に壓倒され候ゟ頃日打臥候仕合乍然昨今は先快復仕候いづれ明後日も拜青可仕候得共自然其節何歟御趣向も有之候事に御坐候はゝ御示し相願度爲其

鳥渡相窺申候草々頓首

八月廿日　　孝允

三良老兄　御内披

（三良は尾崎三良）

一七五　槇村正直宛書翰　明治八年八月廿四日

亂筆高恕荆婦よりもよろしく申上吳候樣申出候

過日來再度ゟ朶雲相達一々拜見仕候早速御答可仕ゟ處日々取紛意外ゟ失敬偏に御容赦可被下候實は玉韻をも相汚し度内々盡愚按見候得共近來こゝろも離れ容易に趣向も出兼其中一日々々と御答も餘り遷延仕候に付不取敢一書相呈申候先以老兄始御滿堂樣御揃御壯榮奉賀候弟も且々消光御放意可被下候到今日候ゟは當春來鴨涯に居住ときめ不申段實に後悔千萬毎度井上どもへ愚痴をならへ申候

（井上は井上馨）

一　金餅態々圖面數帋御示難有奉存候此圖に相定め度何卒よろしく奉願

候金地がねは詮議仕候處甚不足に御坐候得共吉田ゟ便りに御送り可仕候
不足ゟ處御地にゟ相調ひ候得は御願仕度もし六つヶ敷御坐候得は其中あ
とより求め候ゟ御送可仕候

（吉田は吉田右一）

一　陳存周態と藏六へ御見せ被遣候由無疑品と鑑定に相成候得は珍藏仕
度付ゟは千萬恐入候得共御家來にゟも御申聞袋師游古にふくさ御申付其
上にゟ指物屋ゟ上手に新規ゟ箱御命じ被下其ふた裏へ藏六ゟ鑑定相調候
得は實に難有奉存候

（藏六は秦藏六）

是非とも御家來より勘定書は一々御取付奉願候無左ゟは此上も御厄害
を懸候ゟは御願仕候事も出來兼申候間吳々も嚴重に御願仕候

一　北條炭斗火箸ゟ代も吉田ゟ便に御送り可仕候間よろしく御願申候

一　忠太郎ゟ事色々御手數何とも恐入申候乍此上御序ゟ節可然御願仕候

（忠太郎は木戸忠太郎）

一　曾ゟ願置候土地一條もよろしき處御坐候はゝ何分にもよろしく御願
仕候

一　杉浦弘藏來月一日二日頃御地へ參り候由同人も病人にゟ頻に閑靜ゟ
地を希望いたし候間自然格別ゟ騷動無御坐候得ば土手町ゟ二三間用立候
ゟもよろしくいづれ同人も老兄へ御依賴仕候事と奉存候に付此段をも申
上置候

（國重は國重正文）（谷口は谷口起孝）（山本は山本格馬）（杉は杉孫七郎）（山田は山田顯義）（十八眞は横村正直）

御多務中毎々數多ゟ願情申出何とも奉恐縮候自然東京に相應ゟ御用向も
候はゝ無御容赦御申越可被下候聊なりとも御償申度奉存候乍毫末御滿堂
樣へ可然御致意御願仕候其中時下別ゟ御自愛第一に奉存候草々頓首

八月廿四日夜

尙々國重谷口山本諸氏へも可然御致意御願申上候以上

兩三日前杉山田に被誘上野に至り二氏皆有雅吟弟も申譯に則與ゟ拙吟
信口相認申候則備御一笑申候

遠樹帶雲淡　荷花暎水開　閑游消一日　清話忘歸來

十八眞老兄御内答　　松菊

別符乍御手數御願申候

（三條公は三條實美）
（岩倉家は岩倉具視）

（下文は別紙なり）
三條公岩倉家など辭表云々御申越是は虛說乍然岩倉は何と歟ぐづ云事有之候趣何も筆頭には難盡隨分種々無量內情は有之申候實に弟も意外之事而已に御坐候御內々

一七六　內海忠勝宛書翰　明治八年八月廿五日

亂筆御推讀可被下候

御火中々々

（渡邊は渡邊昇）
（毛利家は毛利元一）

爾後打絕御無沙汰仕候先以御淸安大賀此事に御座候弟も且々消光御放意可被下候府下之近況も渡邊知事より御承知と存申候于時毛利家御養子一條實に遷延に相成何とも御氣の毒に奉存候弟も始終心頭に相かゝり居候得共相應之人物に無之ゆ折角被托候甲斐も無之に付色々と心配いたし居候事に御座候然處漸山本重介納得爲致過日福原芳山とも相談いたし候處同人も至極同意なり付ゆは左樣不日取きめ可申候元來此人柄に付候ゆは兼ゆ御嘶しもいたし置候事に付元より御異存は無之事と奉存候依ゆ此段入御耳置申候

一　爰元內情は難盡筆帋弟も後悔不少候世の中ほと引當に不相成ものは無之候何も御內々先は爲其如此御座候其中時下御自愛第一に奉存候草々頓首

八月廿五日　　孝允

忠勝　兄御內々

（忠助は內海忠勝）

一七七　木梨信一宛書翰　明治八年八月廿六日

（前原は前原一誠）
（吉田は吉田右一）
（中野は中野梧一）

先以御淸適奉賀候過日一書差出御一覽被下候事と奉存候實に前原之始末は不都合千萬於弟も不平至極に御座候于時今頃吉田參事出京中野一條も

是非今少し抑留之論に申込候乍去當人も此余餘り長くはとまり申ましく候于時老兄も先達ゟ御内情御申越被下候處實に兼ゟ御持病も有之一入御苦勞之邊御察仕候得共何卒御氣持も御くつろき被成候ゟ今暫御奉職只々萬禱仕候さては毎々御手數奉恐入候得共別符御とゞけ被遣候樣奉願候先は爲其草々頓首

八月廿六日

孝允

（梨花は木梨信一）

梨花老兄御内々

尚々

御滿堂樣且は正木へもよろしく御致意奉願候以上

一七八　吉富簡一宛書翰

明治八年八月廿七日

亂筆御推讀可被下候

殘炎退兼候處彌御清安に大勉强大賀此事に御坐候さて過日一書差出置候通山内一條も彼是御配意と御氣毒に存じ候于時此度吉田出京同人へ御托しにゟ頻に同人よりもそばゟ香爐任御望候樣承知仕候然處また一ゟ御勘考を相願候は實に如此御配意被下候高意は先收社ゟ務を以店ゟ商法と申儀にゟも無之偏に友誼を以御助成被下候事と格別感銘いたし居申候其故先達ゟ來井上其外來る人見る人大坂に關係有之候ものは吉富より之くじと歟こゝと歟御叱りと歟御意見と歟申聞候得共是も必竟弟ゟ不埒と恐入痛入申候且又弟も兎角身の爲にゟも無之宗像も同意にゟ双方ゟ頼ゟ趣に承知いたし此間鳥渡一筆に盡され不申候無據口入世話いたし候仕合兎角ヶ樣ゟ事にゟ蹉き候故元より是からは注意不致ゟは不相成候得共惡氣にゟも無之則失策にゟ御坐候如御承知弟ゟ失策は前後難數仕合其度毎とに友誼を以助成いたし呉候もの哉又は心配いたし呉候人より一品つゝ獻上を被申付候ゟは分散歟閉店ゟ外は無之然るときは御助成も御配意も權兵衞こんにやく此邊も何卒御聞わけ被下御願申候袋は則獻上可致是も被奪がたちにゟ金を

（山内は山内久三郎）（吉田は吉田右一）

（井上は井上馨）（吉富は吉富簡一）（宗像は宗像直二郎）

かりた覺へは無之候得共久しく質入ニ委に相成居漸手戻り候に付任御沙汰相收め申候偖そばニ香爐も弟ニ爲には何百圓に付き居候哉不相分其譯は公金を平平ニ爲に損失ニ事は御承知ニ通爲其面目も無之隨分幾分歟其あをちも喰らひ申候左候ゑは其上平平息子歐洲におゐて豚兒ニ姓名を以公使官等にゑ莫大ニ借財いたし往來二千余圓ニ損失と相成申候其上昨夏より當夏まで豚兒ニ書狀も爲其に相絶ち氣遣も不一形候旁にゑそばニ香爐と水指とは銕面皮ながらも差殘候約束に御坐候然處歐洲ニ金一條も通り拔け候事と相考へ候歟香爐も水指も絶ゑ何たる音沙汰も無御坐候弟も亦如此奴へ二度と催促をいたし候もこゝろうるさく候間彼も彌不義理ニ上に違約いたし候得は些弟も當然ニ惡もの（平平ニ惡ものと可致世間にゑは當り前なり）と相成候ゑ差引勘定を十分にいたし可申歟と相考へ申候（是は公金の外私金に付ゑ云々）御一笑々々大略辨解ニ趣御承知被下御了簡御願申候○井上一條も先日より運ひかけ不日相片付候事と存じ候實に一朝一夕ならさる元因に付春來ニ混雜不容易（平平は平原平右衛門）

候如此事にゑ大苦心をいたし候事は其益何に有之候歟少しも不相分歎息ニ限りに御坐候○一體ニ景況情實は不面白事而已何も歟も千萬種々類違ひニ集合是が今日ニ有樣とは乍申一目的に貫通と申事は萬々六つヶ敷何歟ニ拍子にゑ一部が纔に一利益を得る位のものに御坐候弟も先年ニ大病より腦痛寒暑には尤甚敷連宵無眠と申事も不少困却此事に御坐候其故物毎わすれ易く候ゑ當惑仕候然しそば丈は且々覺へゑ居り申候○中野も先日御不快に有之候由最早快方と察し申候何卒可然御致意御願申候先は爲其如此に御坐候時下別ゑ御自愛第一に奉存候頓首

（中野は中野梧一）

八月廿七日　　松菊

樂水兄御内々

（樂水は吉富簡一）

一七九　三條實美宛書翰

亂筆　高恕奉仰候敬白

明治八年八月廿九日

（板垣は板垣退助）

拜呈今夕元老院章程寫早速御投與被仰付奉萬謝候如　尊慮何卒板垣へは被仰聞置候方可然奉存候別には參議中にゐも格別議論は有之間敷明治元年三月ゑ詔へ何日ゑ詔と御認入に相成且元老院開閉は天皇陛下ゑ思食を以如何樣とも相成候一條御加入相成度於私は此他一向申上候事は無御座候且又今日被仰聞候御輔翼云々今一入被仰上候ゐは是非大臣方は不及申卿侍從長も勝手に御内議へ伺候相成御都合に御運被爲在夕景より高崎番長も御内儀ゑ弊を入々承知仕候處爲前途甚以不宜御事と奉存候誰こそ惡人と申人も無之由に御座候得ども御内議中擧ゐ因循姑息ゑ固結と申事に御座候是は婦人ゑ情態左も有之べくと想像仕候乍恐今日ゑ際

（高崎は高崎正風）

至尊是に被遊御安着候ゐは不相濟御儀と奉存候付ゐは兩三日中今一應倍従仕候ゐ參宮申上度其中い曲拜謁ゑ上言上可仕候先は爲其恐々頓首九拜

八月廿九日夜　孝允

内呈

（此書は宛名を闕く明治八年三條實美に致せるものなり）

一八〇　三條實美宛書翰　明治八年八月三十日

（三井は三井商會）

三井分散ゑ内情有之候由承知仕候自然左樣相成候ゐは又々大不融通

（板垣は板垣退助）

謹呈昨夜元老院章程板垣へ御示ゑ邊申上候處尚愚考仕候處内閣一同へ先を生じ皇國ゑ一大變に御坐候間是非とも御助力無之ゐは不相濟事と御示いづれも同意ゑ末板垣へ御示可然歟と奉存候其とも板垣出勤仕候奉存候速に御着手奉仰候拜白

へは一席にゐ御示に不相成ゐは不都合も可有之歟と奉存候へとも今日も出勤不仕候へは外一同ゑ處は速に御示今日にも御決着に相成居候方御都合歟と奉存候恐々頓首九拜

八月三十日　孝允

内　呈

（此の書は宛名を闕く明治八年三條實美に致せるものなり）

一八一　井上馨宛書翰　明治八年八月三十日

證文

一　貳十五圓

右敗北いたし候處實正也來る亥（明治八年）の九月中御拂可申候也

八月卅日　　松　菊

世　外　様

（世外は井上馨）

外白二つ借用

白一つは黑十六の事也

一八二　井上馨宛書翰　明治八年八月

一　華士族祿支消に付祿券之事も一兩日中に相發し候由此事に付候ゟは弟愚見も再三陳論候得共如意には被行不申必政略にとり會計に取り經濟に取り候ゟも間接して損害不少如此疎漏之所致を人民上に旋し候は實に政府不正と申候ゟ可然幾應にも綿密にいたし且慣習之道理を辨別あらんことを望み候得共如何ともいたしがたく只政府之勝手のみを慮り人民之損害を不察改革候ときは人民之反對を受忽人民困難に陷り人民困難するときは又再其反射を政府に受け政府艱難せり元來政府は人民之爲の政府にして政府之爲め之人民にあらず此說は少しは老兄と違ひ候歟とも相考へ候得共他日再會仕候節御高論相窺可申且君主之國にゟ人民之平安幸福を謀り候ときは其釣合無之ゟは不相成必竟君主と云共和と云皆國之形勢性質によれり付ゟは日本は其形勢性質を以無疑人民平安幸福を得る之宜を察せすんはあるべからず依ゟ祿支消之祿券發行に相成りしに付ゟは華士族之位地先一定之處政略上にとり第一義と相考へ候處是も前後と相成

遺憾千萬に御坐候

（此の書は宛名署名及び月日を闕く明治八年八月木戸孝允が井上馨に贈れるものなり）

一八三　大久保利通宛書翰　明治八年九月一日

亂筆高恕

先以御清適奉賀候さては輸出入之一條に付先日來財務課高崎氏よりも逐々上申則別紙も此程落手仕候如此次第にゐは一般人民不容易困難に陷り候は必然と奉存候何と歟是等之儀は目的相定居不申ゐは不安儀と奉存候依ゐ差出申候間得と御一覽奉仰候草々頓首再拜

（高崎は高崎五六）

九月一日　　孝　允

甲東盟臺御内拆

（甲東は大久保利通）

一八四　杉山孝敏宛書翰　明治八年九月五日

今日横濱へ罷越歸途山尾之預招此書則於山尾相認申候亂筆御推讀可被下候

昨夜は態々御來駕被下忝存申候さて國力云々之文字是非全文中へ挿入いたし度主意にゐ御賴申候處全文之意味に差障り候ゐ候ゐは殘念なる次第にゐ昨夜一見いたし處にゐ隨分都合もよろしき歟と相考申候得共尚又再應御復讀被下精々可然樣御挿入可被下候先は爲其草々頓首

（山尾は山尾庸三）

九月五日晩　　杉山兄　　允

（杉山は杉山孝敏）

一八五　槇村正直宛書翰　明治八年九月七日

亂筆御推覽可被下候

先以御清適奉賀候さては先月十六日頃李家某歸京に付曾ゐ御配意を相願候金瓶代金藏六へ遣し候分なり幷拙書差出し候處御落手被下候哉元より大丈夫なる

（李家は李家文厚カ）（藏六は秦藏六）

事と相考候得共隔地に付一應相窺申候爾他書狀兩三度差出申候に付定ゑ御落掌被下候御事と奉存候爲其一書相呈申候逐日秋冷別ゑ御自愛第一と奉存候草々頓首

九月七日夜

尙々不日歸京可致と存申候杉孫七郎も過日來見舞に罷越于今滯留いたし居申候十六日頃ゑ書狀に內密入御耳候一條申上候ゑ于今御案事中にゑ御返辭無之其中色々評判有之是等御耳に入候ゑは尙更六つヶ敷歟と心配いたし申候どふぞ其御運に至り候樣にと不絕こゝろは用ひ居申候先は御含まで草々

十八眞老兄御內密　松菊

（十八眞は横村正直）

一八六　岩間正之宛書翰　明治八年九月十一日

御疎濶に打過候處先以御淸適奉賀候さては過日來屢御光來被下候由に候處兎角驅違失敬相働候段御容赦可被下候明晩剋重ゑ御光來被下候由被仰置候趣承知仕候然處明晩前約有之外出いたし候間甚自由ヶ間敷候得共自然明後朝にゑ御序御座候はゝ御立寄可被下候拜靑何も窺可申候先は爲其草々頓首

九月十一日　木戸

岩間樣御直

（岩間は岩間金平後ち正之）

一八七　靑木周藏宛書翰　明治八年九月十一日

亂筆御推覽可被下候池田其外へもよろしく御致意御賴申候

爾後彌々御淸適奉賀候さては別紙頃日長沼島田より差越二百圓は無餘儀次第に付弟取替候ゑ吉田參事へ相托し（此分御留守より御返濟有之候）月々小遣等ゑ入用も大略相定候樣申越候千圓云々ゑ辻些過分ゑ樣に被相察候得共御離緣一條に付候ゑは不容易やヶ間敷事にゑ弟ゑ辨解不致已前は得と情實も不相分

（池田は池田謙齋）
（長沼は長沼太郎兵衛）
（島田は島田良岱）
（吉田は吉田右一）

種々と長沼烏田等も不足申居隨ゐ世間にも何故と相評し候樣之次第にゐ一難事之末なり且は又向方之心持にいたし候得は殊に女子なり前途之事も想像候ゐ少々は自分どもの内證金之用意も可有之歟都合三百圓ほどの違ひに付今日餘りやか間敷申も不面白事と相考へ千兩は兄にも御異議は有之間敷と相答へ置申候乍去急は金圓相渡し候譯にも參り不申自然再緣有之候とも決ゐ相ぼれと申事には有之間敷金を目途に云ゆる金の媒酌と申ものにも可有之歟付ゐは容易に金は不被相渡此邊は詰度烏田長沼等も保證無之ゐは不相成事と奉存候此處までは三日之便に可出と相認俄に用向如沸終に失其機申候先達ゐ大人之處へも罷出候ゐ烏田長沼どもより申越候事も御談じ申候定ゐ御留守より申參り候事と奉存候吉田之便に取替置候金も御留守より御持參に相成申候御按し如何歟と相考候得共前段之次第に付不得止取計らひ置申候左樣御承知可被下候

一　本邦も都合無事廟堂も種々之色混雜いたし中々前途之事も不容易歐洲などの政治上に付先生家之苦心致し候とは丸に情實雲泥之違にゐ總ゐ我刀にゐ我身をはぎ候樣之事而已年が年中歎息のみの有樣何卒速に兄だち御歸朝御盡力無之ゐは不相成事と存申候弟も先年來之病氣後頓に亡氣瞑眼等之事も時々有之甚困迫罷在申候實に今日之御興涯は誰も打寄只々御羨申候此際に少しも前途之御仕込申も疎と奉存候

一　實に可歎可憐は品川老母之死去なり嘸々當人之悲歎と不堪想像候昨冬之病氣甚懸念いたし品川へも歸朝相すゝめ候處一旦快氣に付此上は當分は大丈夫と相歡ひ申居候處豈圖此頃之赴報にゐ驚歎いたし居申候

一　御申越之松野澗一條も逐々漸内務之八等之處へ雇ひにゐ出申候彼之勉勵にゐ昇級は可致何卒宿志は爲相遂度ものと存申候尤乍老屈些燒餅なきにあらず松野も内務に六つヶ敷候得は開拓へ可出と賴置候處開拓にも可雇入と申候處へ内務より命有之申候此節は俄に大藏にも金が不足と歎申候ゐ急に諸省之定額を減するやら何なら大混雜にゐ爲其諸省之官員等も俄に減省之次第旁にゐ松野等之處も隨分六つヶ敷隙取申候當時冗官等（品川は品川彌二郎）

を減省候は元より可然事と存候得共當春定額等も或省は改ゟ増額いたし又頓に不足などゝ申候ゟ俄に減省候等も甚（マヽ）體裁なり於是等は不無大感也實に小官員を減し候より弟等ゟ如き無用長物一頭にゟも減し候方少しなりとも目立申候

一　本邦人ゟ大弊は何分あたまがちにゟ固有堪忍ゟ性質甚乏敷一時ゟ名利雷同奔馳其故前途ゟ目的と申ものは一向不定只々攘夷論ゟ反對にゟ民權ゟ急を論而已相唱候もの不少此種類行政中に混入今日ゟ一患に御座候先は爲其一書相呈申候時下別ゟ御自愛第一に奉存候草々頓首

九月十一日

尚々荆婦よりもよろしく御傳申呉候樣申出候以上

（青蛇は青木周蔵）

青　蛇　兄御直　　松　菊

一八八　伊藤博文宛書翰　明治八年九月十二日

過日は御多務態々御光來奉謝候さては今日井上より尚又板垣等ゟ情實も承り申候乍去前途ゟ處は中々拍子か揃ひ不申ゟは所詮老屈無力ゟものかあたまを出し候とも決ゟ目的は無之却ゟ不面白結果を到底こしらへ候樣可相成歟と深く苦心仕候付ゟは明日は是非登門仕候ゟ愚意も陳述尚御意見も承知可仕候畫後參上候ゟ可然哉自然御問に候へは明晩にゟも明後朝にゟも參上可致候先は爲其草々頓首

九月十二日

博　文　樣内密　　孝　允

（井上は井上馨）
（板垣は板垣退助）
（博文は伊藤博文）

一八九　伊藤博文宛書翰　明治八年九月十四日

昨日は御苦勞千萬に奉存候さては大翁ゟ處如何に御坐候哉可相成は明日彼方へ罷越候ゟもよろしく又は緩々引受候ゟもよろしく依ゟ此段鳥渡申上試候草々頓首

（大翁は大久保利通）

九月十四日　　孝　允

博　文　殿

（博文は伊藤博文）

一九〇　伊藤博文宛書翰　明治八年九月十四日

亂筆高恕乍御手數今御一答奉願候

昨夜九々無眠にゐ困却仕居申候

朶雲拜見仕候折角只今別紙差出候積にゐ認候處に御坐候今日はとふも不工合にゐ昨夜來臨床いたし居候に付明日にいたしもらひ候へは大に仕合申候老兄にも御一同御來光被下候事と奉存候明日に相成候得は緩々御光來相願候事に御坐候尤其にゐ不都合に御坐候へはいたし方無御坐候先は爲其取急草々頓首

九月十四日　　孝　允

博　文　樣御内答

（博文は伊藤博文）

一九一　伊藤博文宛書翰　明治八年九月十八日

過日は御光來奉謝候さては其後大翁相尋候處不在に付愚意認置昨日不圖翁來訪意見も承知候處愚按とも些齟齬到底如何歸着可致哉と愚考いたし申候且又小室岡なとも來訪乍去是は兩人とも之主意にゐ來訪候事に付未板垣との關係には至り不申尤對板垣候ゐ之談話に付候ゐは夫相應に相答へ置申候付ゐは一應御談もいたし置申度明夕にゐも登門可仕候間左樣御含置可被下候決局纏まり論は六つケ敷事歟と奉存候弟も一昨日突然亡氣于今工合不宜候間今日は參上不得仕候

新聞論も御着々に相成候はゝ何卒速に御着手可然と爲前途に奉存候最早少々漏洩他の新聞よりませかやし色々不都合有之候歟に承知仕候兎角策を伐れ候氣味不少殘念に奉存候先は爲其草々頓首

九月十八日　　孝　允

（大翁は大久保利通）

（小室は小室信夫）

（岡は岡本健三郎カ）

（板垣は板垣退助）

博　文　樣御内披

一九二　伊藤博文宛書翰　明治八年九月廿日

（博文は伊藤博文）

朶雲拜見仕候昨日は御邪魔申上候賞典祿税及支那新聞願置候積りにゟ相盡不申則是より返し可申候于時昨夜正院より史官法制局等之章程被差廻候に付一見候處法制局長三等と確定に相成居候處左候ゟは往々不都合と奉存候尤御差閊無之候得はよろしく御坐候へ共乍序申上候草々拜復

九月廿日　孝　允

博　文　樣

（博文は伊藤博文）

一九三　伊藤博文宛書翰　明治八年九月廿三日

（英公は英國公使パアークス）

昨日は御光來奉謝候さては英公より是非明日罷越候樣强ゟ罷越御承知之如く不快にゟ迷惑に御坐候得共再度之事に付推ゟ貴家御兩方御出被成候得は可罷越歟とも相考へ申候一字と申事に付晩食にゟは有之間敷と奉存候然る時は服は平服にゟもよろしく御坐候哉御尋仕候先は爲其草々頓首

九月廿三日　孝　允

博　文　樣御直

（博文は伊藤博文）

一九四　槇村正直宛書宛　明治八年九月廿四日

亂筆高恕

頃日は朶雲御投與拜見仕候先以御清適御奉職大賀此事に御坐候さては御多務中萬緒御配意を蒙何とも奉恐入候弟も過日來腦病にゟ難儀仕候上痔疾にゟ困却引籠保養世上之事も迂遠に打過候處西京邊には薩人と劍客集會擊劍を催し候と歟申風評ちら々々傳承いたし申候元より虛說とは存申候東京も西の隱居左出現已來古流之ものぐつ々々申候と申事折々承り申候半は困窮士族之僥倖を希望候處より起り候ものに可有之むやみの古流

（西の隱居は西郷隆盛）（左は左大臣島津久光）

（木村源三は木村正幹）

にも困り候ものに御坐候于時に陳存周一條折角被仰下候に付い細木村源三へ相頼置申候間御聞取奉願候金錦之處は御任せ申上候可然御差圖可被下候頃日之朶雲土手町にゟ御認と有之誠に大悦仕候何卒御繁劇之折御除け場にも相成候得ば實に本懷此事に御坐候乍末大人始御滿堂樣へ可然御致意奉願候其中御自愛第一に奉存候草々頓首

九月廿四日夜

（國重は國重正文）（谷口は谷口起孝）（山本は山本格馬）（新島は新島襄）（十八眞は槇村正直）

尙々弟之病氣も格別には無之候間御放意可被下候乍去先年之大病來所詮舊には復し不申少し何歟心配いたし候と忽腦へ相障り誠に困却いたし申候何卒速に西京住之宿志相遂些保養仕度と頻に希望仕候御序之節國重谷口山本新島などへ可然御願仕候以上

十八眞老兄　御内披　　松菊

一九五　野村靖宛書翰　明治八年九月廿五日

昨夜は御一新已來之御安眠と實に想像仕候乍去盛衰之因緣御考味可被下御客樣とは乍申始終御馳走負けも出來不申候于時別符二通何卒此度之便を以御とゞけ被下候樣御願仕候草々頓首

九月廿五日　　木戸

野村　樣御直

（野村は野村靖）

一九六　伊藤博文宛書翰　明治八年九月廿七日

（世外は井上馨）

朶雲拜見則警察規則致返上候御落手可被下候さて御端書云々未世外より何たる事も不致承知倩推考いたし候得は實に浪華之一條一生之大失策にゟ輕々之罪恐入候次第潮水油混合いたし候道理無御坐却ゟ爲前途不都合千萬と相考候間是非政府は以前の地位に御復相成候方可然弟等も決ゟ誓神明及丈けは在野候とも盡力も可仕候過日此邊之事も世外へも申越置候仕合に御坐候いか樣思案想像仕候ゟは混合論は下策中之下策必爲前途不

宜と存詰申候殊に弟も不絶不快腦痛にも困迫いたし申候御高察可被下候
草々頓首

九月廿七日　　孝允

博　文　樣御内答

（博文は伊藤博文）

一九七　伊藤博文宛書翰　明治八年九月廿九日

（大久は大久保利通）

今日縷々御内話仕置候一條は何卒偏に御引受被下大久之處も御說諭速に相運候樣御盡力吳々も御願申候大久と地を替へ候時は必被行候事に可有之付ゐは大久にも是非勘辨いたし吳候樣只々希望仕候付ゐは幾應にも御願申置候間必齟齬不仕樣奉願候先は爲其草々頓首

九月廿九日

尙々遲緩仕候ゐは失機宜不都合千萬に付此邊は厚く御含置被下無拔目御願仕候且又明治二年十二月三日

主上於御前左之通之御沙汰も蒙り居候に付是非とも此度は蒙御沙汰度奉存候

明春支那朝鮮爲使節可被差越右は重大事件に付卽今より交際規程古今酌酌篤く取調可有之旨御内意候事

十二月三日　　木戸從三位

實美
具視
實則

右之通に御坐候間十一分之御盡力只々御願仕候拜

博　文　樣御内披　　孝允

（博文は伊藤博文）

一九八　伊藤博文宛書翰　明治八年九月廿九日

亂筆御推覽可被下候

昨日は御光來奉謝候島一條彌岩說之如く相違無之事に候得は大久之見込に隨ひ元より微力之限相盡し可申候尤板との行かゝりは其中に道付不申は不相成と奉存候乍去此一事鎭定之上は直に御暇相願申候元より一時之艱難に當り候ゐは平生之平不平は兎も角も死に至るまても諸兄に隨從可致候得共頑固之腦疾押詰候事實に難出來無理に御抑留有候はゝ拷問に預り候も同樣にゐ一時之死ところには無之且此度出京以來一入苦心一層病疾之增長を覺へ申候内心而已を勞し政治上には毫厘も益は無之實に赧顏是亦一大苦心也此段は御推察被下大久へも屹度御傳へ置達ゐ御願仕候爲其草々頓首

（島は島津久光）
（大久は大久保利通）
（板は板垣退助）

九月廿九日曉

尙々岩翁より確說御承知に御坐候はゝ御洩し可被下候御願仕候以上

（岩翁は岩倉具視）
（博文は伊藤博文）

博　文　樣内密御直

孝　允

一九九　伊藤博文宛書翰　明治八年九月三十日

心事不相達候得共志は不相違候得は小生も一小男之面目世上相對し候ゐも不得狂候

今朝大翁來話新報一條大體之處元より同意乍去小生心事縷々昨日來陳述候邊にゐは分明之返答不得承心事十分一も貫徹不致と涕泣之至に御坐候一昨夜新報承知不堪長歎事至于此從來之思考を一變いたし死生之際に相投し聊其責を相塞き度と存詰殊に平生病弱滿足之御奉公所詮無覺束實に心事如火自然も徹底不致以上は面目も無之狂人と相成候外いたし方無御坐痛哭浩歎何卒大翁之意中今一應御承知被下度懇願之至に御坐候於于此流涕益切草々頓首

（大翁は大久保利通）

九月三十日

尙々小生十四年來股下之刻苦維新以來心事不能達一平生之快々至于此不堪坐作候御推察可被下候心事不被行候得は此面目にゐ決ゐ朝に被相

立不申候間朝鮮行之兵卒にゟ御慈悲を以被仰付可被下候號泣相願申候

芳　梅　様極密　　孝　允

（芳梅は伊藤博文）

二〇〇　伊藤博文宛書翰　明治八年九月三十日

（森山は森山茂）（大久は大久保利通）

朶雲拜見委曲承知仕候森山へは可然御示令有之候事と奉存候過刻一書相呈候通小生心事一條大久へ御示談被成何と歟安堵いたし候丈けゟ決答承知仕度無左ゟは弟進退困迫心事縷々先書申出候次第に御坐候草々頓首

九月三十日　　孝　允

博　文　様内御答

（博文は伊藤博文）

二〇一　井上馨宛書翰　明治八年九月

（前文破れ不明）

□□□□□□覽ゟ上御投火奉願候□□□弟も處世ゟ目的も抑□立候ゟも終に人に狂られ人情負けしと申もの歟つゝまる處は苦腦苦思ゟ堺へ一人陷り實に殘慨遺憾血泣ゟ至に御座候

昨夜ゟ集會如何ゟ御都合に御座候哉面白き御談話も出來候哉

○岡本へ面會ゟ上林有造云々も現情相話し度候得共左候ときは自然□□を呑込候□□□□ゟ仕合に御座候其上朝鮮ゟ一條其際に相生じ旁ゟ次第にゟ一旦同意いたし候事に付最早いたし方も無之此上は諫死仕歟苦死仕候歟約束通りいたし可申一生間こゝろならざる事ゟ始終爲人に純粹ゟ心事を盡し候事不相成遺憾血泣不堪仕合に御座候得ども終に々々こゝゟ落入候次第如何とも難仕朝鮮一條相濟候まで餘命御座候はゝ斷然宿志通に仕へく少し□□□御憐察可被下候□□其節は御□□□□□に奉願（以下缺）

（□破損以下同）（岡本は岡本健三郎）

二〇二　井上馨宛書翰　明治八年十月二日

（此の書は末尾を缺き宛名署名及び月日明ならざるも明治八年九月木戸孝允が井上馨に贈れるものなり）

先以御清安奉賀候さては兼ゟ御内話御坐候福其外集會一條來る五日三字

（福は福地源一郎）

（田中文部は文部大輔田中不二麿）より罷越吳候樣田中文部より申越候是非五日には別に御用事御坐候ともの節角老兄ゟ御内意も有之相催し候事に付（表面は其とは不申只學問ゟ事に付寄合云々い細面上御話可申候）御差繰被下候樣御願申候爲其態々申進置候草々頓首

十月二日

尙々吳々も無御失念たとへ俄事出來候とも御差繰可被下候弟も一應御同道仕候ゟ前約有之候に付少々御先へ引取可申候以上

城北

世外老兄御内々

（世外は井上馨）

二〇三　田中不二麿宛書翰　明治八年十月四日

先以御清適奉賀候昨日は態々御光來被成下候處取紛緩々御高話も不得寛失敬ゟ段御容赦奉願候折角今日は御丁寧に被仰聞是非倍席仕候覺悟に御坐候處今日も腦病不快參朝も不得仕仕合至極殘念に奉存候得とも參上不得仕候間此段不惡御了承奉願候且又千萬乍失敬モリー夫婦へも可然御斷御願仕候いつれ不日同氏をも相尋可申候先は爲其一書呈上仕候草々頓首

十月四日

尙々荆婦よりもよろしく申吳候樣申出候拜

不二麿老兄御直拆

孝允

（不二麿は田中不二麿）

二〇四　伊藤博文宛書翰　明治八年十月五日

先以御清安奉賀候

一　加藤弘藏より昨日元老院ゟ談話に預り候に付政府ゟ主意も得と陳述いたし置申候章程等ゟ事も相尋候に付貴所へ御目にかゝり候ゟ御尋可致と相答へ申候いつ頃罷出候ゟよろしく候哉僕より相傳へ可申と申置候其前尙又得と相談し置可申と奉存候三四日中御都合ゟ折御示可被下候

（加藤弘藏は加藤弘之）

一　森山事從長崎直に朝鮮へ被差越候由直に釜山ゟ人民を連歸り候と申事なとは無之義と相考へ候得共世上種々ゟ流傳御坐候に付鳥渡御尋申候

（森山は森山茂）

（世外は井上馨）・（北代は北代忠助カ）一　世外一條決局北代忠吉歸京不致に付不相濟と申事に御坐候處最早北代は不居合とも裁斷可相成事と奉存候此度いかゝなる事歟小野は出すに相濟候由皆居合せ不申ゐはと申事に御座候へは上野も英國より歸り不申（上野は上野景範）ゐは不相成何卒大木へ御談じ相成迅速裁斷相運候都合には參り申間敷哉（大木は大木喬任）御盡力奉祈候山田へも屢迫り立候得共兎角延引勝にゐ實に困入申候草々（山田は山田顯義）頓首

十月五日　孝允

博文（博文は伊藤博文）　樣　内密御直披

二〇五　林友幸宛書翰　明治八年十月五日

亂筆御推讀可被下候實に井上（井上は井上馨）も如此長引候末又北代（北代は北代忠助）一條にゐ延引候は氣の毒に御坐候

先以御清榮珍重此事に御坐候さては北代忠助歸縣之事は兼ゐ司法省より

も相とゞめ置候由之處内務省より許可にゐ先達ゐ歸縣いたし候由之處今日井上始銅山一條之裁判悉皆口書等も相濟候由之處北代之歸縣のみに付一統之裁許皆相滯り井上も爲其大迷惑如此長引候末また如此不都合にゐ大に困却いたし居司法にも山田始北代一條遺憾に存居申候此上北代之歸京延引いたし候ときは一統之大迷惑に付何卒至急歸京候樣急々老兄より御申越有之候て可然と奉存候只今イ藤（イ藤は伊藤博文）山田（山田は山田顯義）なども來集老兄より其御盡力速に有之候方可然と皆申居候先は爲其草々頓首

十月五日　孝允

友幸（友幸は林友幸）　樣御内密

二〇六　杉孫七郎宛書翰　明治八年十月六日

昨夜申上置候に付登堂いたし候處御留守にゐ甚殘念に奉存候乍遺憾引取申候草々頓首

十月六日　　允

聽雨老兄

（聽雨は杉孫七郎）

二〇七　伊藤博文宛書翰　明治八年十月六日

亂筆高恕井上も一兩日中に歸京可致歟と奉存候如何に御坐候哉

今日は態々御光來被下候由駈違何とも殘念に奉存候分離一條大翁ゟ見込（大翁は大久保利通）

は如何に御坐候哉今日ゟ形勢にゟ分離候ときは不日無疑大混雜出來條公（條公は三條實美）

も不容易御苦心に至り不申ゟは不相濟と奉存候其上今日ゟ姿にゟ分離候

ときは條公ゟ御力も余程相削き候次第に御坐候大翁ゟ見込相窺度態と相

呈申候草々頓首

十月六日

（井上は井上良馨）

尙々昨日も條公へ井上少佐歸京まで出勤御猶豫ゟ事も相願置御用濟被

下候付ゟは井上少佐歸京ゟ上御評議歟兎に角實地ゟ事も御尋可有之候

（伊藤は伊藤博文）

に付其節は出勤候樣御沙汰相願申候此際一兩日中にゟも保養いたし度

且又今日は一小變事家內に出來實に困却いたし申候以上

伊藤　樣內密　　木戸

二〇八　井上馨宛書翰　明治八年十月六日

（カ）

朶雲拜見實に御立服（マヽ）ゟ處御尤千萬に奉存候人心如此邊は兼ゟ御嘶仕置老

兄も平生弟を御慰諭被下候に何そ俄に又如此ゟ御都合に候哉其故昨晚刻

御別れ申候節縷々御嘶仕老兄一應大久保へ御談ゟ後弟十一分に相論し自

然此間に大齟齬有之候はゝ元より於弟も洋行などと申事は不思寄候尙拜

（大久保は大久保利通）

（安場は安場保和）

靑得と相窺可申候へ共人世ゟ波濤に無之波濤中ゟ人世況哉安場如きもの

元々舊知と申ものにも無之尙其他如何樣ゟ奴輩いつれに居候歟も難計又

必十年や二十年や百年にゟも始終如此もの無之樣と申事は決ゟ六つケ敷

必竟彼等に不被致が目的故さまで御確怒無之ゟ御無理を申上るとは存な

がら始處女より出彌不都合に御坐候へ御同樣に脫兎之外元よりいたし方無之乍去大久へ靜に御決意にゟ十分御論じは尤至當之御事と奉存候先は爲其草々頓首

十月六日

（此書は宛名署名なし明治八年木戸孝允が井上馨に贈れるものなるべし）

二〇九　伊藤博文宛書翰

明治八年十月八日

亂筆御推覽可被下候

昨日は御光來奉謝候さては不分論一決に相成候上は是非久翁（久保利通）も內之方は手を引不申ゟは不都合千萬と愚考仕候何卒此邊は得と御含置被下度元より過日御內意も承知仕候に付御疎は無之事と愚考候得共其等之事は機會有之後日改ゟ難申出義に付乍老婆心尙又入御耳申候草々頓首

十月八日　干　令

芳　梅　樣（芳梅は伊藤博文）　極密御內披　御火中々々

二一〇　小幡高政宛書翰

明治八年十月九日

亂筆高恕

爾後先以

御清適に御盡誠奉大賀候東京も一向相變候事無御坐正山（正山は正木基介）二氏なども逐々歸山（山田春三）近況い曲御承知と奉存候得は益御盛之御氣色にゟ中々御藏鋒之御模樣は無之とも說十に八九老ゟ益盛とは眞に老臺方之御事を申候事と浦山敷奉存候弟などは近來一際衰困所詮愉快之戰爭は難出來と自ら歎息仕候とふ歟近來は大津（大津唯雪）老人も余程盛之由每々御面會と奉存候乍去流儀は彌改革ビールと相改候樣子重疊之事存申候何歟御珍事も御坐候はゝ相窺度奉存候先は御見舞旁奉呈候其中時下御自玉第一に奉存候草々頓首

十月九日

尚々當地ニ御方は至ゟ御壯剛御安心可被成候御賢息樣には此節不懸御目候得ども御丈夫ニ由には承知仕候近日御歸山に付別に不申上候

松菊生

餅山老臺御直拆

（餅山は小幡高政）

二一一　内海忠勝宛書翰

明治八年十月十日

御火中々々

亂筆御推讀可被下候當春浪華云々も大失策々々弟も無余儀被相迫候ゟ今日は後悔御察可被下候

當月二日ニ朶雲只今落掌不取敢拜見仕候先以御清適御奉職奉賀候弟も且々無異消日御放意可被下候先年大病ニ餘響に候歟時々腦痛是には殆困却仕候先日來も被腦候ゟ先日御投與被下候朶雲ニ御答も可仕と相考居日々取紛及遷延候段何とも恐縮ニ至に御坐候平に御容赦奉祈候蕎麥ニ香爐無相違相達實に不一形御配意已に々々人ニ手に落候處も偏に兄ニ御世話と長く思起し申候此香爐も余程弟にとり候ゟは高金に當り候得共聊自分ニ好み候ものに御座候得は又慰し候處も有之候得共此上人に横樣より被奪候ゟは遺憾千萬に御座候何も御陰と存申候○政府上云々左も可有之と存申候實は政府中ニ精神も飯一に無之一人にたとへ候ゟも腦中に種々ニ精神御座候ゟは所詮一身を保ち候事も六つケ敷次第に付隨分困難と存申候其に封縣ニ一論根は往々可患事と相考へ申候其上士族などゝ申ものは窮するほど舊を思ひ候人情其にまた民撰家が封縣家に一致いたし候などの奇妙事も有之是は其性質におゐて元より可一致事は決ゟ無之筈に御坐候得共只々一不平より生し候ゟ如此相成申候其故滿天下に眞に爲國家と一二年にゟも一途存詰不動ニ說と申ものは甚乏敷浩歎ニ至に御座候且又世間總ゟ輕薄に馳せ官員と學者尤甚敷大に世ニ害を釀し候もの不少必竟まわりまわれは我身に歸し候事に御座候へ共是亦一時ニ不平より生し候事

と被相察申候無識無智ニ至只々流涕ニ限りに御座候朝鮮論も實に一難事元來此事ニ葛藤如御承知不容易紛擾を釀し是も我より求め候次第に付條理を以差押へ置候處此度已に火を出し候には實に歎息ニ至に御座候是も南洋中ニもしも一頑固國にゟ少しも別に關係無之處に御座候へは元より不問に歸し候ゟ可然と相考候得共朝鮮へは已に數百人ニ日本人も滯在官員も在留かゝる上はいつ異變も難圖丸に不問にいたし置候と申事も出來間敷去とて世ニ慓輕なる議論にも隨かわれ申間間敷候得共一難題ニ種は相まき候次第に付いづれ國家ニ一艱難と存申候先は大略申進巨細ニ情態中々筆頭に難盡候矢原將軍御書中ニ趣に實に相像いたし申候其中時下御自愛第一に存候草々頓首

（矢原將軍は吉富簡一）

十月十日晩

（吉敷は内海忠勝をいふ忠勝は周防吉敷郡の人なるを以て木戸孝允よりかくいひしなり）

尚々別帋乍御手數御とゝけ御願仕候以上

吉敷老兄御内披　　糸米

二一二　井上馨宛書翰

明治八年十月十三日

（前文缺）
參上仕候處已に御外出殘念に奉存候昨日ニ餘談と申も別に差急候事にも無之前途ニ處不得止吐露仕置不申ゟは關心ニ事も不少依ゟ細縷御打合せ申置度事に御座候

今日林有藏に御逢に相成候はゝ十一分に御論談有之度他日其御噺も承り可申候草々頓首

（林有藏は林有造）

十月十三日

尚々今日は大村益二郎祭日にゟ夕刻は在宅不仕に付御光來被下候ともも不在に候間御斷仕置申候拜

（此書は宛名署名を闕く明治八年木戸孝允が井上馨に贈れるものなり）

二一三　杉山孝敏宛書翰

明治八年十月十四日

昨日御賴申置候ものは態々御持せ萬謝々々十八史略一條何分矢之催促に
ゐ困り申候どふぞ何にゐも御工夫相調候はゝ明日中に是非御賴申候明日
は人差出し可申候先は爲其頓首

十月十四日　　松菊

秋香兄御内々

（秋香は杉山孝敏）

二一四　櫻井直養宛書翰　明治八年十月十七日

朶雲拜見仕候先以御清適奉賀候此度は御出京之由東京に珍ら敷松茸御惠
投御高意奉謝候いづれ御目に懸り御禮可申陳候一應之御請迄草々頓首

十月十七日　　孝允

直養老兄御答

（直養は櫻井直養）

二一五　伊藤博文宛書翰　明治八年十月十八日

世外より昨日新聞一條早々御取定に相成候樣預傳言申候何卒迅速相運候
樣御工夫可被下候明日之一條に付候ゐは是非岩大も出勤無之ゐは不都合
なり貴所より御一筆御投しに相成候ゐは如何左板に關係之事は條へ皆讓
り候樣之工合にゐ實に不宜と奉存候草々頓首

十月十八日　　木戸孝允

伊藤博文殿極密御直披

（世外は井上馨）

二一六　伊藤博文宛書翰　明治八年十月廿日

御手紙拜見今日工部省へ參り一歩違ひにゐ拜青不得仕御宅へ罷出候處御
歸りの程も不相分候に付引取申候只今福原へ御出に候得ば罷越候ゐもよ
ろしく御都合御示可被下候只今歸宅候に付草々頓首

十月廿日　　孝允

博文樣御内々

（福原は福原恭輔）

（博文は伊藤博文）

二一七　井上馨宛書翰　明治八年十月廿日

御火中々々

尚々本文に縷々不覺先きゝ事まで申上候が實は此度ゝ一條其外百怨弟ゝ蝟集候事も四五日前屢承知所詮此度は六つヶ敷と覺悟仕候中には慥かなる事も承り申候然し今更喋々決ゐ不申陳候然し三條公へ餘波有之候ゐは不相濟と厚く懸念仕候昨日中も少しは御話可仕歟とも相考へ候得共差扣へ申候

（三條公は三條實美）

昨日は御邪魔仕尚昨夜は御勞と奉存候さて大隈一條老兄御承知に相成目的も爲前途に有之候事に御坐候得は實に國家ゝ幸福別段急に弟面會仕候事も無之弟も實に末路を誤り遺憾に御坐候へ共已に今日ゝ形勢に至り候上は斃るゝまで諸氏一同聊寸志を盡し平生に報ひ可申乍去往々言に不被言情實有之申候

（大隈は大隈重信）

是は只々老兄而已御含被下決ゐ人には御洩らし被下間敷血泣ゝ至乍去是は半言半語も誓ゐ口外も不致況哉今日ゝ際何も歟も心中にゐ殺し申候御憐察可被下候もしも幸にして一片付いたし無事に候はゝ眞に病骨如何とも難任心底仕合に付是非斷然程克退去仕度候間此段御含置可被遣候草々頓首

十月廿日曉　　老伴

（世外は井上馨）

二一八　世外老兄極密御内披　獨逸代理公使オンボルレーベン宛書翰　明治八年十月廿日

昨日は朶雲御投與被下候處外出中にゐ御答も不得仕失敬ゝ段御容赦可被下候先以御清適珍重に奉存候然は明廿一日芝天光院において博覽會拜見ゝ段被仰聞難有奉存候然處明日は前約有之候に付乍殘念無余儀御斷仕候他日重ゐ拜見仕度奉存候先は爲其如此御座候草々頓首

十月廿日

〆

獨逸代理公使
（破損）オンボルレーベン貴下　木戸孝允

二一九　井上馨宛書翰　明治八年十月廿三日

今日御約束申上客來引つゝき意外に時刻相移り直に正院へ參勤仕候二字前に鳥渡相窺可申と奉存候乍去御用事御座候はゝ必無御用捨御外出可被成候實に昨日之事情具さに可仕と奉存候事にゝ御座候先は爲其草々頓首

十月廿三日　孝允

（世外は井上馨）

世外老兄内密

二二〇　尾崎三良宛書翰　明治八年十月廿三日

過日は朶雲御投與拜見仕候爾後御尋可仕と奉存候ゝ此節は不容易難事出來其而已に不意（カ）御無沙汰仕候筆頭にゝは中々難申盡候どふ歟些御不快之御樣子定ゝ御當分事とは奉存候得共十分に御保養第一に奉存候草々頓首

十月廿三日　孝允

（三良は尾崎三良）

三良　樣御内呈

二二一　杉孫七郎宛書翰　明治八年十月廿三日

昨日朶雲御投今夕横濱佐藤へ御出之由何字之蒸氣車にゝ御出浮被成候哉其節御供仕度依ゝ御樣子相窺申候也

十月廿三日　松菊

（佐藤は佐藤與三）

大立壩老兄御直々

（大立壩は杉孫七郎）

二二二　槇村正直宛書翰　明治八年十月廿四日

極密

亂筆御推讀被下然る後御火中御願候

過日一書相呈候後直に過る十日付之朶雲相達不取敢拜見仕候彌御清適奉賀候○三井純金代は於爰元三井方へ相拂可申左樣御承知可被下候○劔客云々も御内意之邊を以通し置可申候于時過る十九日島津左大臣直ちに御前に罷出是非三條太政大臣を此儘被差置候ゟは決ゟ安寧は難保他日必外國之奴隷と可相成云々種々罪條を羅織し及密奏余程至尊も御内怒被遊候由終に廿二日被召出御前三條は一新已前より格別爲國家盡力候ものに付朕深くこれを信す依ゟ密奏之趣採用不致差戻すとの勅語に御坐候處左府云く然らは當職是非御斷り申上ると申候由又勅語に朝鮮之事件も有之不容易時節に付一和勉勵候樣被仰聞候處左府云く同僚之儀かく爲國家密奏仕候已上は朝に並らひ立候儀は難出來と申上佛然として退出いたし候由辭表も當日直に差出しいつれ免職被仰付候事と被存申候三條公を言語道斷罵詈いたし斷然退け候ゟ自

（三井は三井商會）
（島津は島津久光）
（三條は三條實美）

分太政大臣に昇り候決意と相見へ申候其には段々尻押し有之華族どもゝ逐々人に蔑視され自然舊を思ひ候人情有之又世間之士族は盡く月に日に舊時を思ひ出し候情は切迫し候處より天下前途之事は少しも不相分只々今日之處より頻に封縣を希望し候處に付封縣論を以煽動候に付大に相動き候氣味有之申候（其手段は先士族を益く士官兵士にいたし徴兵を解くと申事之由然るときは直に封縣と不云して封縣之もとひ相定り申馬鹿士族や愚民は前途は不相分一時皆喜悦候事に付其機を察し候ものと相見へ申候）爲其華族どもは大に其尻に喰付奔走盡力候もの不少又一手段には征韓論を主張いたし大に征韓家を抱き込今日之政府にゟは決ゟ征韓は不得致に付政府を一掃いたし基本を定め候ゟ征韓之實行相立ると申煽動不怠又大に可怪は民權家退職連中之不平皆其尻に喰付（板垣退介河野敏鎌其外多人數）申候元來民權と封縣（島津の事は六七年前より相分民權家には敵の筈なり）相氷炭性質を異にいたし候ものも相合し必竟人物之品位下等之故なり對外人候ゟ可恥之至なり種々姦計密謀是非政府を轉覆いたし候との之巧みなり爲其諸縣不平之士族をも爲煽動處々へ派出し候由（前原彦太郎も內通之よし）實に不客易次第於此際

（前原彦太郎は前原一誠）

益政府之方向不相締は益爲後來人民之大不幸と存申候幸に海陸軍確乎と不相動乍去是も朝鮮之一條等にゐも不問に置き曖昧に陷り候ゐは所詮維持は出來不申軍さぎらひの士官どもゝ其處は大に心配何分にも於政府條理を朝鮮之一條も無之ゐは決ゐ悠久之目的は無之內密申居候是等は先年分裂に候時より之行がゝりも有之中々筆頭に難盡於政府條理を逐ひ御所分之處には內決相成居申候依其海陸軍は肅然といたし少しも今は動き不申大略右之次第に付京攝神戸邊は尤大事と奉存候何卒格別之御注意肝要と存申候內海（大坂神戸）靜間（內海は內海忠勝）（靜間は靜間謙輔）にも如此內情具に相通じ置申度候得共夫々ゐ手狀出し候譯に參り兼または弟よりいろ々々內情相洩らし候邊世間へばつといたし候ゐは實以不宜自敗之種と相成候儀に付前條肝要之處極御腹心之ものを以てなりとも內海靜間へ御內通有之候はゝ可然と奉存候內海靜間及御腹心之ものへも弟より御洩らし申候邊は決ゐ御發言無之奉願候況哉御同廳中之ものへも弟より申越候段は極秘に御願候先は取急如此に御坐候草々頓首

十月廿四日　糸米

十八眞（兄極密御獨披）（十八眞は槇村正直）

（下文は別紙なり）御落手に相成候はゝ慥に相達候段早々御一答御待申候

二二三　杉孫七郎宛書翰

明治八年十月廿五日

御留守に付乍殘念引取申候明朝天氣に御座候はゝ八字頃迄に登門可仕候もしも雨天に御座候へはよろしく御座候哉御都合御示可被下候ゐは如何爲其申上置候草々頓首

廿五日　允

立墩老兄御內々（立墩は杉孫七郎）

二二四　井上馨宛書翰　明治八年十月廿六日

亂筆高恕吉富より申越候事御坐候是は拜青可申上候

（吉富は吉富簡一）

朶雲拜誦仕候彼是御配意奉謝候今日いたし方も無御坐候得共條理丈けは相盡し置度心事に御坐候間其邊相達候へは安心仕候何卒小室へも御序に

（小室は小室信夫）

可然御致意奉願候草々頓首

十月廿六日　　世外老　兄御内答　　允

（世外は井上馨）

二二五　井上馨宛書翰　明治八年十月廿九日

亂筆御推讀直に御火中奉願候

御答書拜見仕候青江之方は又候申來り候はゝいたし方無之候間判金を御社へ差出置可申候間御貸渡御願申候是又弟之爲に相謀り候事には無御座

（青江は青江秀）

候得共物每始終ヶ樣之行がゝりに相成申候

（林勇は林有造）

林勇之事も申出置申候弟も最早此上は心底に不相任元より浪華にゐも入々御談申候通廟堂中に入候とも決ゐ如意參り候事は萬々無覺束在野候ゐも爲政府に相成候へはよろしくと心事申陳候得共終にまたいたし方無之出京と出懸け候處果して如初見一つとし愉快之事も無之春來快々消光仕候然る處今日此際に投じ候ゐは決ゐ二念無之弟一身丈けの心得を以奉公仕候決心に御座候去とて堂中同意のものは決ゐ無之イ藤に仕候ゐも一處に居り候中には終に交際も不得仕樣相成可申自然此際生のび居候事に御座候はゝ兼ゐ御話も申候通一身丈けの處を得申度心に背き如此苦とも申ものは古人も有之間敷と泣涕仕候乍然今日は一身丈け飽まで之了簡にゐ最前より屢入御耳候通　此處のものは御察可被下候決ゐ此事も不言積りに御座候得共苦情之上へ種々被仰下候事も御座候間申上候弟丈けの處は乍不及是迄數度吐露仕候草々頓首

十月廿九日　　孝允

馨　　樣極密御内披

必御火中可被下候

（馨は井上馨）

二二六　大久保利通宛書翰　明治八年十月廿九日

亂筆高恕

今日も粗申上置候朝鮮一條緩急及着手之御順序等も迅速今日之形勢におゐて御決定相成候方可然奉存候今日三條殿に申出置候御壹誠奉仰候さて又今曉承り候に付入御耳置申候濱町御内輪及海老原某其外評論新聞社中とも煽動にゐ不平徒三百余名連合にゐ不日太政大臣殿辭職云々之建白いたし候企御坐候由是又彌差出候へは即時に御處分有之候もの歟動搖無之樣御處致有之度奉存候先は爲其申上候草々頓首拜

十月廿九日　　孝允

（三條は三條實美）

（太政大臣は三條實美）

甲東老臺御内拆

（甲東は大久保利通）

二二七　田中不二麿宛書翰　明治八年十月廿九日

亂筆高恕御火中奉願候

朶雲拜誦明日十字過於正院拜青可仕現場之工合は皮膚上より一視いたし候とは大に違ひ候事も有之是等之處は屢右手合申候とも所詮彼翁之滿足には至り申間敷此邊は何卒厚く御含置奉願候先夜板へ誤る云々などは意外之話にゐ元より弟は股にゐもくゞり候得共決ゐ目的之無之事は出來不申且昨日も申上候通今日に最早求る事も無之此上は決心之處を以奉公と思ひ込申候一證を申候へは攘夷論も間接而已にゐは決ゐ開け候譯には參り不申候老兄へ對し候事に付大略無腹臓申上候御一覽之上は御打消奉願候草々頓首

十月廿九日　　孝允

（彼翁は大久保利通）

（板は板垣退助）

不二麿老兄内密御直

（不二麿は田中不二麿）

二二八　槇村正直宛書翰　明治八年十月廿九日

長與へは過日申上候府下内情御洩らし可被下候

亂筆御推讀奉願候

（長與は長與專齋）

先以御清適奉賀候頃日一書差出申候定ゑ慥に御落手被下候事と奉存候さては新島より如別帋申越彼方ゑ注文はよろしく御坐候得共如御承知此坐敷を西洋流にいたし諸々へ烟筒等をこしらへ沓にゑ上下候ゑは忽大破れと相成甚困却仕候自然も老兄など御繁用ゑ節御避所位に相成候へは於弟も本懐至極に御座候候且又過日薩人其外よりも相談に預り候へ共丸々相斷り申候其上新島書中に有之候如く貸渡し候ときは元より少しも明き間は無之何分ゑ儀電報返答いたし呉候様申越候に付センヤクモ、コレアリ、ハナハダコマル、アトヨリヘンジ、イタスと申越置候當分ゑ事に御坐候へはい

（新島は新島襄）

たし方無之候得共長居され候ゑは困り申候先約も有之候へ共達ゑ相斷候邊を以都合克御斷被下候へは大に難有奉存候其とも暫時ゑ事に御座候へ無理に斷り候もいかゝ歟と存申候木屋町歟三本木にいたし呉候へは大に於弟も仕合申候同人へも別帋相願大略申越候へ共御直に可然御斷奉願候此後ゑ處は名ばかりにゑもいづれゝ歟貸し渡し約束にゑも仕置候はゝ色々面倒出來不仕候ゑ可然歟とも奉存候何分にも先約を段々相斷り候處を以都合克御斷り御願仕候

○一昨日左大板參依願免職と相成申候隨分人心を煽動いたし候に付何歟と騷々敷御坐候弟も先月は甚不快にゑ大困却仕候得共如此事變に際し候ゑは聊なりとも盡され候丈けは盡し不申ゑは不相濟候間一身丈は抛ち候ゑ勉强候間御放意可被下候誠にひゞきの入たるあたまに付不氣候に候へは忽大痛を生じ苦み申候御憐察可被下候夢になりとも鴨涯を見たくと時々西望仕候

（左大は左大臣島津久光）

（板參は參議板垣退助）

郵便其外左よりも金なと出し隨分不平徒は動し候趣向之由御地邊も別ゑ御注意申も疎と奉存候先日申上候次第は内密内海靜間へは御通し被下候事と奉存候

（内海は内海忠勝）（靜間は靜間謙輔）

○陳存周は無疵相達難有奉存候別帋乍御手數長與專齋へ御とゝけ奉願候其中時下御自愛第一に奉存候草々頓首

十月廿九日晩　木　圭

（十八は横村正直）

十八　老　兄御内密

二二九　田中不二麿宛書翰　明治八年十月三十日

極密御一覽必御投火奉願候今日も所不盡多々他日拜書可申上候心事御降察可被下候

過刻は態々御懇話奉謝候左之二條之主意御聞及之邊御示相願度候

外國人旅行之事條約改正之事を心配する事

示し樣無之歟と鳥渡愚考仕候

（西翁は西郷隆盛）

別に御内話仕候海陸云々且西翁等之關係不容易猶豫候ゑは大間違之着手に可相成歟と奉存候御歸り後段々入耳仕候嗚呼先は爲其草々頓首

十月卅日　允

（不二麿は田中不二麿）

不二　先　生内密御直

二三〇　杉孫七郎宛書翰　明治八年十月三十日

朶雲拜見仕候

華頂之宮は御病氣之由なれとも當節少々御快由にゑ段々入説之風聞御坐候

伏見之宮は當節野營調練に御出之よしなれども不良煽動之〻手段は頻に盡し候由に御坐候格別之事は仕出し不申とも宮方が兎や角と申候ときは人の方向を動し候に付御注意御疎は無之と奉存候得ども尚又申上候來月一日には御供可仕候草々拜復

十月卅日　孝允

孫七郎様御答

（孫七郎は杉孫七郎）

二三一　井上馨宛書翰

明治八年十月三十日

昨日一書差出御一覧被下候事と奉存候昨日も色々不面白事而已段々やれ々々些休息可仕と相考候處青江來り長談是も最初よりゑ行かゝりに付如何とも難致實に又當人も氣の毒千萬來月までもちつゞき候得は是非五百金は無之ゑは不相成由に付老兄へ御相談いたし候ゑ御周旋相頼むとねだり付去とて弟別にいたし方無之同人へ與へ候譯にも參り兼候に付小判差上け置合ゑ五百金御周旋被下候ゑは如何弟も迷惑は無此上候得共義理に責められ申候證文なりとも取置候はゝ金が出來た時は返し可申返さねは取上け可申候弟も如此周旋尤不得手困り候までに御座候困迫ゑ餘此段申上候青江參上候はゝ何と歟御指揮可被下候先は爲其草々頓首

（青江は青江秀）

十月卅日晩　孝允

世外様御密

（世外は井上馨）

二三二　井上馨宛書翰

明治八年十月三十一日

亂筆高恕

今朝御妨仕候別帋も彼の考への儘相認候ものに付御含までに入御内見申候今朝入御覧候分も此分も御一見ゑ上は只々老兄ゑへその下へ御收め可取ものと御考付ゑ處は只々老兄ゑ御含を以御論じ可然と奉存候今朝御内話申候ケ條丈等は可然事に奉存候御一覧後は他日御返與可被下候先は爲其草々頓首

十月卅一日　海草生

世外老兄極密御獨披

（世外は井上馨）

二三三　宍戸璣宛書翰　明治八年十一月一日

（敬宇は宍戸璣）

朶雲拜誦い曲承知仕候態々御示難有奉存候些御風氣之よし不氣候之折柄別ゐ御加養專一に奉存候拜復

十一月一日　敬宇先生拜復　允

二三四　尾崎良三宛書翰　明治八年十一月二日

（山田は山田顯義）

先以御清適奉賀候さては過日御内話云々内々山田へも得と相談し申候檢事に極適當之人物御考も御坐候はゝ至急御示被下度先は爲其不取敢草々頓首

十一月二日　三良老兄御内々　孝允

（三良は尾崎三良）

二三五　山田顯義宛書翰　明治八年十一月七日

（イ藤は伊藤博文）（笠墩は杉孫七郎）

亂筆高恕

朶雲拜誦仕候實に御違約申上何とも恐縮仕候へ共今夕はイ藤方へ不罷越ゐは不相成約束有之候に付無余儀御斷申上候昨日笠墩老人に被誘不圖船場より向島邊を散歩仕候北風烈敷滿路之塵には隨分困却仕候折角一書可差出と奉存候處預御尋申候間不取敢御答申上候草々頓首

十一月七日　鐵龍老兄御内答　城北

（鐵龍は山田顯義カ）

昨日御内話仕候檢事之方は遂々御着手と奉存候且又張紙之根元は御分りに相成候哉窺度奉存候以上

二三六　田中不二麿宛書翰　明治八年十一月七日

先以御清適奉賀候過日は色々御手數を相願何とも恐縮仕候其節は無余儀

次第にゐ失敬仕候弟も困苦無限仕合御閑暇之節御内話も仕度生來之苦心未如此之際出逢不申候到底不幸不福之ものと明らめ申候先は爲其草々頓首

十一月七日

尙々尊宅之番號御序に相窺置度奉存候以上

不二　老兄内々御直披　允

（不二麿は田中不二麿）

二三七　井上馨宛書翰　明治八年十一月八日

（小室は小室信夫）

亂筆御推覽可被下候過日小室來訪不在にゐ殘念に相考申候御逢も御坐候はゝ可然御傳言奉願候

昨朝は態々御光來御懇諭云々實に奉謝候弟も其後再三再四昨夜も徹宵苦案仕候處左之通之次第にゐ今更異變仕候事いかにも出來不申候左樣御承知可被下候

一　大坂之云々實に輕燥に決し前途之愚見も有之候得共情實に負け出京仕奉職せし處果ゐ事之齟齬を覺へ大に後悔仕候

一　其後紛紜不絶必竟事之成就不致弟之志思相貫候得ば元より死も不厭候得共自然板垣のあとに殘り候とて弟之志思も不能遂只一己苦思痛心いたし候までにゐ格別國家に益も無之と存詰十分板垣へも大久へも意見申陳し是非辭職と決意仕候事

（板垣は板垣退助）

（大久は大久保利通）

一　左大臣云々等にゐ老兄よりも再三出勤御勸め有之候得共實に前途を推察いたし候へは弟之心事におゐて目的無之實に只一己苦界に陷り候心地仕候故强ゐ眞情を吐露候得共終に勢を不得止又御說諭に隨ひ左大臣を一防禦仕候に決心仕候

（左大臣は島津久光）

左大臣之主意は兼ゐ御嘶も申候通封縣之目的付ゐは近來段々密謀も有之候趣承知いたし候得共必弟出勤不仕とも是位之處は今日之政府一體之上は强ゐ難き事も有之間敷と相考弟一旦出勤仕板垣のあとへ殘り候

上は不容易苦心にゐ其詮も無之邊を思ひ遣り情實も再三再四御噺もいたし候得共則其節は御勘考とも到底齬齟仕候事

一　一旦左大臣を防き候に決意候に付ゐは元より薩人と同意不致ゐは防くに付利益少く候間專ら心を用ひ候事

曾ゐ大山彌介（大山彌介は大山巖）を話に歸朝後薩州に歸り西郷（西郷は西郷隆盛）に面會先年同人を征韓論を非として大に論破し且去年臺灣後未征韓論を餘波有之候も大に論破いたし候へども此上自然彼より何歟隙を開き候事有之候ときは先年來を行がゝりも有之國も陸軍中も如何とも難致所詮拙者を手式には不任と申事も承り居り申候

一　左大臣を防き候一難題を上へ朝鮮を一條出來候に付ゐは自然も政府を目的未定にして終に外より大難論騰沸候時所詮制し候目的無之其上今日を際薩の國と陸軍中と大混雜を生じ從ゐ世間を不平士族其外相應し候ときは一日も難保は當然を勢にゐ中々百新聞有之とも決ゐ制し候事は出來不申依ゐ弟も決心いたし益大山等とも談合いたし朝鮮を始抹等に付候ゐも擔當いたし候次第にゐ必竟左大臣を防き候目的より終にこゝに至り候事（今日を勢に中止候ときは薩も陸軍も兼ゐ大山話し候通實にいたし方無之彼是に加へ候ゐも今日を勢を汲量し太平を求め候外有之間敷と奉存候）

左大臣を論相達候ゐ天下平安に候へは任其望可然事に御坐候得共愚見にゐは所詮前途六つケ敷と相考其も弟あたまを不出とも可然事と存候得共不得止弟出勤候上は關係不仕ゐは不相成道理に御坐候

一　右を次第に付於今日弟別に良策無之求ゐ此苦界に陷り本意ならずも從事不致ゐは不相成行がゝりと血涕を呑み決心仕候弟不幸不福不及語自然是なりゐ斃れ候はゝ心事聊後人へは御洩し可被下候御憐察可被下候先は別路無之に付態と心事申上置候草々頓首

十一月八日曉

尙々福澤（福澤は福澤諭吉）などへも今日に至り決ゐ聊も求る所無御坐乍去彼も弟へ對し心切を考へは已に度々承知仕候事も御坐候間毫厘にゐも御含を以心事

御洩らし被下候へは弟も彼の報心切候譯に御坐候凡人世本意ならずして義理にからまれ苦界に投し候ほど悲きものは無御坐候きのふの花はけふの夢今は我身につまされて義理云ふ字は是非もなやとは弟今日之けふがひとあきらめへ申候

他日所有物之事を御願仕置度奉存候草々以上

世外老兄内密御直　　孝允

（世外は井上馨）

二三八　寺島宗則宛書翰

明治八年十一月八日

亂筆高恕

先以御清榮奉賀候さては如別帋青木周藏より申越候弟も得と存じ不申候處定而外務省より御送りに相成候分と奉存候何卒可然御所分奉願候且又先便同人より種々苦情申越獨逸在留之處は是非御斷申上度段相願候無余儀情實も御坐候よし此段御含置可被遣候草々頓首

十一月八日

尙々別帋青木之書狀は御一覽之上御返與奉願候只々老臺之入御覽候まで差出申候拜

寺島老臺御内披　　木戸

（寺島は寺島宗則）

二三九　福地源一郎宛書翰

明治八年十一月十日

亂筆御推讀可被下候

昨日一書差出御落手被下候事と奉存候さては檄文と歟申候ものは別帋之よしにて餘り馬鹿々々敷懸御目候も歎息之至に御坐候得共自然他所新聞にて又種々之浮說なと加へ流布候ては頑愚士族を迷わし候譯に付不取敢御廻し申候間頑愚士族等之醒覺候樣御一評被下候て可然御上梓可被下候先は爲其草々頓首

十一月十日認

木戸孝允文書巻十五　（明治八年十一月）　九段　二百八十七

水邊老　兄御内密　御火中

（水邊は福地源一郎）

二四〇　杉孫七郎宛書翰　明治八年十一月十日

態々朶雲御投與拜見仕候只今四五輩居合候付老兄御落馬之儀頗念之餘申出候處一同一口より出るが如くに申候に付杉氏惣身痛み候得は決ゑ今日深川邊まで御用にても必出掛には相成不申直に病氣唱へ得手の帆にゑ引込に相成候然るに深川まで出掛に相成候は明日大久保なども罷越旁窮屈にも有之果ゑ作病に相違無之といづれも掌中をさすか如しと申出し候於弟も兼ゑ之御流儀に付左も可有之と御推察仕候兎に角明日は早めに參上可仕候ゑ直に御供可仕候先は爲其草々頓首

（大久保は大久保利通）

（兒玉は兒玉淳一郎）

十一月十日夜

尚々只今兒玉來訪是非々々老兄と一戰爭相願度頻に希望仕居申候格別夜も深け不申候間御光來被成候ゑは如何

（此書は宛名署名を闕く明治八年木戸孝允が杉孫七郎に贈れるものなり）

二四一　伊藤博文宛書翰　明治八年十一月十二日

頃日御來話之中島津云々種々考案いたし候ゑも別に案し付も無御坐元老院之事を被任候とも只其人之爲に一時御都合を被計候ゑは後患も難圖付ゑは是迄他之華族も舊藩住居願も出候とも不被差免條理も御坐候事に付條理上にゑ御とゞめ相成候歟又は宮内省出仕時々參　朝候ゑ主上御相手にも相成氣付位申出候樣被仰付候ゑは如何（時勢之事に付候ゑ今一入輔之處にゑも盡力無之ゑは不相成と奉存候）尤是等之御案じは頓に諸彦にも有之候事と奉存候得共愚按之まゝ申陳候

（島津は島津久光）

（副島は副島種臣）

副島一條何とも愚按難申陳從來を以想像候ときは兎角時論に隨從し時勢之變移に應し說を變し一艱難を釀し候事其例し不少一二を擧れは己巳之

（丸山は丸山作樂）

歳浪士之勢に媚從し丸山等之黨を誘ひ終に政體論を主張し面目を變するに至る一新以來之一蹉跌なり且又此度之如變其元因同しく此人より出當時また察勢前説を模稜候なとゝ申説は世上に譁し此度之一事も亦一新以來之一艱難なり決而一己之好惡を以申出候事に而無之候得共かゝる性質之人爲國にはおそろしく危く存申候乍去魯國之云々も不容易此上は諸彦之説に從ふ而已尤深く御熟考乍此上萬禱いたし申候先は爲其如此に御座候也

十一月十二日

（佐々木は佐々木高行）
（河野益也は河野敏鎌）
（伊藤は伊藤博文）

尚佐々木は可相成は速に御登用可然と奉存候東京ホリス甚混雜いたし候よしに而河野益也狼狽しゝ而出勤候と申説有之申候承り候まゝ申出候腦中工合あしく大亂筆御高恕可被下候以上

伊藤殿内密　　木戸

二四二　野村素介宛書翰　明治八年十一月十二日

昨日は御光來被下候由之處折柄外出中に而甚殘念に奉存候さては曾而御噂仕置候拙品兩三古幅一二備貴覽度來る十四日午後より不係晴雨巢鴨別業へ御光來被成下間敷哉當節柄之儀に付精々世上へは穩便仕度去とて同好之士一二輩は相交り不申而は聊風景を損し候歟とも相考申候間内々町田翁と蘭田丈け相招き周旋人は楓川と今一人位は有之候而もよろしき歟と奉存候依而御乞合旁一應申上試候何分之儀御一答奉願候草々頓首

（町田は町田久成）
（蘭田は瀧和亭）

十一月十二日　　孝允

素軒老兄内密御直

（素軒は野村素介）

二四三　大久保利通宛書翰　明治八年十一月十五日

臥床中大亂筆御容赦奉願候

拝啓先以御清適奉賀候過日は態々御光來奉多謝候臥床中大不敬之仕合何

（鶴林一條は朝鮮事件）

とも恐縮仕候平に御容赦奉願候さては昨夕伊藤博文來訪雞林一條も逐々相迫居段々其御着手之緒も相立候處小弟不快之邊も如何哉と相尋申候處御存被下候仕合にゟ千萬殘念之至に御坐候へとも確たる答へも難仕實に又自然も小弟一身之私情より誤機宜害公事候義御坐候ゟは眞以不安次第に付其邊は毫も無御遠慮被盡廟議度申出置申候仕合御坐候其に付萬御疎は不被爲在御事に奉存候得共尚愚案之邊不取敢入御聽置申度奉呈候實は是まで逐々御評議も御坐候中必々容易に御目的通可相達云々其と又必野蠻故戰爭に可至云々此兩條は大概議論も御坐候處かゝる國柄故意外情態も可有之候へ共其間に前兩條に不係事情も出來可仕使臣へ御委任之廉も可有之と奉存候へ共其邊は出發前細密に御評議被盡置度義と頻に希望仕候其譯は出先きにおゐては中庸之機宜を料理と申ものは自然六つヶ敷有樣御坐候ものに付一時之決斷にゟ却ゟ全體に謀り候處之廣益を誤り候樣之事出來候は必難圖と奉存候吳々も其邊之義は爲後來過慮仕候義に付老婆心と奉存候得共申上候恐々頓首拜

十一月十五日　　孝允

甲東老臺御内拆

（甲東は大久保利通）

二四四　槇村正直宛書翰　明治八年十一月十七日

先以御清適奉賀候先達ゟは御答書御投與拜見仕候御地も都合御靜謐之由東京も差向相變り候事も無之乍去内情紛紜頻に探索等よりは入耳申候河瀨も昨日來訪御傳言之趣も承知仕候弊宅等彼是御配意恐入申候三井ゟ地金之代は先日相拂置申候木屋町之家賃常二郎より東京へ送り候歟之樣に傳言仕候千萬御手數恐入候得共總ゟ是等之ものは皆御手元方にゟ可然御願申候先日頃は上方邊之噂も何歟と御坐候處此節は別に承知も不致候因州備前之内に一派不平黨有之候由土州には尤頑固黨と不平黨多く東京へ出沒候ものも不少候九州にゟは三潴白川二縣薩にゟは三郎黨少々有之申

（河瀨は河瀨秀治）
（三井は三井商會）
（常二郎は難波常次郎）
（三郎は島津久光）

候東にゐは元會津ゑもの或は茨城縣に種々ゑもの有之申候近來承り候に佐賀ゑ内も不良徒于今變動を待候情實も有之候樣風說有之申候山本克ゑ方へ入込居候處ゑ探索にゐは三舟へ逐々着手置候都合に付必來二三月頃までには動き候などゝ申候ゐ皷動候由兎角虛喝も多く引當にも不相成候得共度々承知候間入御耳置申候乍去何歟山本も煽動手段は盡し候由間違は有之間敷と存申候先は爲其相呈候時下別ゐ御自愛第一奉存候草々頓首

十一月十七日

尙々三井ゑ分は都合有之候に付相談ゑ上少々待ちてもらひ其故彼方へ相渡し候事は御手帋ゑ參り候後少し手間取申候尤同人納得ゑ上にゐ御坐候先日相濟ませ申候拜

（十八眞は槇村正直）

十八眞老兄御内披　　城北

二四五　杉山孝敏宛書翰　明治八年十一月十八日

昨日は御苦勞千萬に御座候途中にゐ甚殘念に御座候御願申置候一條誠に乍御面倒可成丈け速に御願申候何事も切迫に相成候故兎角こゝろせき申候草々頓首

十一月十八日

秋香兄御内密　　城北

（秋香は杉山孝敏）

二四六　青木周藏宛書翰　明治八年十一月廿日

先以御安泰御奉職珍重に奉存候さては逐々御承知に可有之去月來又不珍紛紜必竟本邦人ゑ識見眞に憂國ゑ爲に確乎不拔なるものは甚少く封縣守舊或は民權等其性質は氷炭相異り候とも不平を以合同候ときは皆一物と相成申候愚案にゐは何でも保太平候得は別に希望候事も無御座候得共所詮封縣守舊に復し候ゐは終に又一變亂を生し不申ゐは不相濟事と懸念いたし申候弟も浪華已來ゑ事も隨分大齟齬而已多く甚失策今日にゐ獨り大

迷惑仕候且九月には固疾聊相發し甚苦み申候乍去去月之紛紜に付候ゑは實に不安次第も有之推ゑ勉強仕候中々巨細之事は筆頭に難盡候何分近來之病骨にゑは實に如何とも難仕候

○井上省三先達ゑ歸朝仕候どふ歟有用之地へ周旋いたし度と存申候

○松野淵は内務八等之處へ先周旋いたし申候少し辛抱候はゝ上級可致候白女房之事を想像いたし何卒速に被迎候樣いたさせ度と頻に脇ながらも

（池田は池田謙齋）

と思ひ申候是等は老物之一役目と存申候

○池田氏は試業相濟非常之褒賞にゑトクトルと相成候由實に是等は本邦人之面目御同慶之事に御座候御序に池田氏へも可然御致意御願仕候

○田中光顯より金圓云々早速同人承り合御預りいたし置可申候

○御舊溫云々先達ゑ申上不遠御答も參り候事と存申候

○ミルレル、ホフマン不日歸國いたし候由定ゑ御逢と存申候ミルレは好人物ホフマンは隨分多慾之由にゑ人物之評判は不宜候得共内科は外國人中にゑも第一之由にゑ文部御雇之米人其外どもゝ托生命候はホフマン一人と申居申候近來日本人之性質等も能く承知いたし非常之手際も不少差向正木退藏已に十死之地に陷り投匕候をホフマン一縷之見込有之よしにゑ終に快復是等は如神手際に御座候

○品川はいつ頃歸り候哉同人老母之不幸は氣の毒千萬歸途も嘸々無力次第と想像仕候滯獨に御座候はゝ可然御致意御願申候

（品川は品川彌二郎）

○桂之留守も至極無事にゑ折節拙宅へも被參候に付安心候樣御傳言可被下御願申候

（桂は桂太郎）

○弟も來原之妹過る十七日於浪華死去只一人之骨肉を相失ひいかにも殘念千萬に御座候

（來原妹は來原ハル子）

先は御見舞御答旁相呈申候時下別ゑ御自愛第一に奉存候

十一月廿日　　孝允

周藏老兄

（周藏は青木周藏）

尚々去月紛紜之際朝鮮香華灣にゟ日本之軍艦へ發砲實に朝鮮一條は如御承知先年來之行がゝりも有之且去月紛紜之際不可言盡情實も有之いつれ於政府所致不致ゟ不相成都合に御座候遷延候得は又意外之難事も有之候歟と被察候事も御座候以上

乍病骨も頻に老兄方之御消日は不堪妬羨候

二四七　伊藤博文宛書翰

明治八年十一月廿二日

臥床大亂筆御容赦可被下候

（大久保は大久保利通）

過日は御光來奉謝候さては今日除服之御沙汰御座候此節之義に付直に出仕可致之處一昨日より例の腦痛相發左足痲痺甚心配彼一條も有之殘念千萬に候得共どふも不任心底且又彼一條も期限御坐候に付甚氣がもめ又爲私情に公事之不都合生し候ゟは不相成過日大久保へも牛刀云々に付少し談も殘り居り候に付一體之處いかゝ哉と今曉書狀出し候處どふ歟きまり候ゟ安心云々と御坐候處如此次第に付一應申上置候先は爲其草々頓首

十一月廿二日　　孝允

博文樣御内密

（博文は伊藤博文）

二四八　伊藤博文宛書翰

明治八年十一月廿二日

亂筆御推讀可被下候

昨日御答書拜見福諭云々於弟も不同意無之候得共學者之所見と實際之情態と齟齬いたし候事不少故に卒然これ等之事を相はかり候も如何可有之哉歐米政府之體裁は一通り之西洋學者は通知いたし居候へども必竟我此人民に適する哉否之加減を考味候ゟ實際上へ切實なる諸彦之思召に候へば一昨日も申進候通在要路ゟ現に此人民を取扱候人々之誠心にゟ料理有之候外いたし方有之間敷等之事はデスホチックに無之ゟは所詮六ケ敷と相考申候學者之說は實に銘說不少候得共歐米之學者に出會候氣味も有之

（福諭は福澤諭吉）

此人民へ比校候ゟ相考候ときは直ちに難用事も不少一旦また其人へ眞に相談候ときは多少其説も不用ゟは望を失し候氣味も有之終に公事よりも私事ゟ爲に被妨候弊不少故に學者ゟ説は在今日ゟは廣くもとめて取捨するまでゟ事に可有之歟過日西村鼎（西村鼎は西村茂樹）なるものへ議院ゟ談に及ひ（華族連引立ゟ爲め）候處直ちに則今より華族と士族（一縣二人）とを召集し立法ゟ大議院相立度と申取調らへいたし候かゝる事が容易に成就候位に候へは決ゟ當時つまらぬ混雜も無之考ゟ如此折ふし齟齬有之候には困り申候只々弟ゟ萬禱するところは實際に適し輕行卒舉無之樣にとのみに御坐候

一　過日御申越しの敎導團は其後も承り候處別に異聞無之種々煽動候ゟ巽説縱横ゟ事歟と相考申候ポリスは第六大區と歟か尤切迫に相論し候よし是も彼等が上書をポリスより番人等へ布告し煽動せしより起り候事に候何卒條理明白に御示し迅速に御處分有之候が上策と相考申候遲々いたし候内には色々波及ゟ弊相生し申候過日河野（河野は河野敏鎌）も頻りに其事を申居候先は爲其草々奉復

十一月廿二日

尙々實に弟も腦部ゟ工合おさまらす氣分閉塞こまり入申候ホフマンにも兎角しかられ申候間當分避居是非いたし度相考へ申候以上

博　文（博文は伊藤博文）　様内密御直

孝　允

二四九　内海忠勝宛書翰　明治八年十一月廿三日

服部も頃日一小屋を構へ申候

臨床中大亂筆御推讀可被下候

朶雲相達拜見仕候彌御清適御奉職大賀ゟ至に奉存候さては此度愚妹死去候に付ゟは不容易御配意奉謝候弟も一人ゟ骨肉十萬億土ゟ離別に付甚殘念に存申候弟も先達ゟ兎角腦痛御坐候處推來外勤いたし候内四日前頃より些甚敷例の左足また痲痺ゟ氣味にゟ甚難儀いたし申候實に二割もの故（服部は服部一三）

所詮いたし方も有之間敷と明らめ申候東京も都合無事不平徒は何によらずがまくさ申候由日本人ニ品位にゐはボルチックなどゝ申處よりニ論は多くは付ものにゐ元來是等ニ論は不平種にいたし候樣ニ次第其故民權或は封縣などゝ性質氷炭ニ違ひも時と折には忽一致いたし申候乍去往々を想像いたし候へは實に浩歎杞憂ニ至如此有樣にゐは獨立不羈と申事も其實事は容易に無御坐候先は一應ニ御禮旁如此御座候草々頓首

十一月廿三日

別帋乍御面倒御屆け奉願候以上

吉敷　兄御内密　　糸米

（吉敷は内海忠勝）

二五〇　杉孫七郎宛書翰　明治八年十一月廿五日

御手帋拜見仕候今日は御出勤ニ由重疊に奉存候實に如此御病身には御氣の毒に奉存候弟も于今臥床困却仕候御尋ニ云々難盡筆頭何卒御退出掛御運動旁御立寄被下候得は縷々可申上候昨日も多人數打寄老兄ニ御健康にゐ段々御病氣は如何なるもの歟必御ふようと且は骨を餘り御おしみ被成候より生し候歟などゝ噂仕候何卒暖かなるときは些御憤發可然と奉存候先は御答まで草々頓首

十一月廿五日

尙々豚兒も過る廿三日浪華へ着いたし候由彌いつ頃東着仕候邊于今電報も無之折角案じ居申候

（豚兒は木戸正次郎）

○昨日萩城ニ近況承り候處帶刀連段々增長候歟ニよし前原歸萩後の尻押と相見へ申候昨年段々苦しみ候事も無益と相成甚殘念に御座候乍去一黨反對ニもの御座候間決ゐ恣には不得仕候以上

（前原は前原一誠）

大立墩老兄御内答　　城北

（大立墩は杉孫七郎）

二五一　兒玉愛二郎宛書翰　明治八年十一月廿六日

朶雲拜見仕候彌御清適奉賀候さては不存寄美菓御惠投御高意ゝ程奉謝候
今以臥病困却仕候いつれ拜青御禮可申陳候草々頓首

十一月廿六日　　孝　允

愛二郎老兄御答

臥床中亂筆御免

（愛二郎は兒玉愛二郎）

二五二　井上齋治宛書翰

明治八年十一月廿九日

御手紙拜見過日は難有奉存候浪華邊は風合不宜趣にゟ干今揚碇ゝ電報無之日々如何と煩念相待而已ゝ仕合其上弟も腦痛少々左足不隨困却仕候先は御答まで臥床亂筆御容赦可被下候草々頓首

十一月廿九日　　孝　允

齋治老兄御答

（齋治は井上齋治）

二五三　伊藤博文宛書翰

明治八年十一月三十日

臥床亂筆高恕

華墨拜見仕候先以御清適引つゝき御繁務と奉存候如御示和戰ゝ間實に不容髮眞に禍福ゝ機不容易事と相考へ申候間精々微細に御調らへ相成出發前厚く御評決に相成居候事肝要歟と奉存候先達ゟ來西陲人は少は求ゟ買戰候氣味は無之哉と内々煩念仕候邊も御坐候へ共諸彦御疎も有之間敷と奉存候に付此上は天命也と相考申候草々拜復

十一月三十日

尙々埋葬ゝ日合不相分浪華は西風暴烈なる由にゟ出帆于今不申來今日も電信を相尋候次第甚懸念いたし居申候以上

博　文　樣内密御答

（博文は伊藤博文）

二五四　中島佐衡宛書翰

明治八年十二月七日

孝　允

臥床中大亂筆御高恕可被下候

昨日は態々御光來奉謝候病體にゟ失禮仕候一昨日よりゟ寒冷にゟ痲痺彌甚敷困却仕候此節ゟ御道中別ゟ御保護第一に奉存候御留守中何歟御用事御坐候はゝ無御容赦被仰置可被下候定ゟ來春は無相違御歸京と奉存候九州中にゟも三潴縣ゟ士族ともは別ゟ頑固不良ゟもの多く太樂一條に付候ゟも大厄害を生じ申候老島ゟ派も此節又生じ候由御内々御聞及も御坐候はゝイ藤どもゝにゟもよろしく御通じ可被成候先は爲其草々頓首

（太樂は大樂源太郎）
（老島は島義勇カ）
（イ藤は伊藤博文）

十二月七日

九段

尙々吳々も御自愛專一に奉存候さて又染井御舊邸ゟ事或はこやし一條等ゟ事に付從僕どもより御尋仕度義御坐候へは御留守居ゟものへ爲尋申候間御命し置奉願候草々拜

切通老　兄御内密

（切通は本郷切通に住せし中島佐衡なり）

二五五　伊藤博文宛書翰

明治八年十二月七日

亂筆御推讀可被下候

爾後御平安大賀々々さては井上も一決ゟ由重疊に御坐候此上は可成丈平和ゟ盡力と存申候尤廟堂上ゟ又御評議は如何哉と奉存候さて又小生も今以臥床寒威ゟ嚴烈には甚以困却いたし居申候近來實に病弱此度ゟ朝鮮一條に付候ゟは末後ゟ御奉公に是非渡海可致と決心いたし候處不幸にして病再發何とも遺憾至極に御坐候乍去是亦いたし方無之此體にゟ所詮奉職候事は難出來元來朝鮮一條相濟候までは强ゟ相考居候處則今日ゟ有樣にゟは有名無實眞以心神不安候に付不日内願可申出自然又戰にゟも相起候はゝ相應ゟ御用可相勤此度井上奉職に付候ゟは好機會候間此段可然御含置可被下候井上よりも御聽取可被下候井上へも相頼置申候如此體たらく實に伴食罷在候ゟも片時も心神不相安候に付幾應にも御汲取可被下候自然やゝ間敷候ゟは無據言葉長く申立候樣相成左候は本意に無御坐候間此

（井上は井上馨）

段は折返し御垂察を御願申候草々頓首

孝　允

芳　梅　樣御内密

（芳梅は伊藤博文）

（此の書月日を闕くも明治八年十二月七日に認めたるものゝ如し）

二五六　伊藤博文宛書翰

明治八年十二月十日

臥床亂筆高恕

先以御清適大賀過日は御光來奉謝候さては其節御噺いたし置可申と相考失念候に付態と爲其申出候過日三浦梧樓來訪折角元老院へ奉職罷在候得共御奉公仕候にも其目的乏敷候故辭表差出候由付ゐは何卒御聞屆相成候樣に御噺仕置呉候樣相托し置申候御承知置可被下候

（世外は井上馨）

○世外之事は如何相成候哉乍序相窺候先は爲其草々頓首

孝　允

十二月十日

博　文　樣御内披

（博文は伊藤博文）

二五七　吉富簡一宛書翰

明治八年十二月十三日

病中大亂筆御推讀々々

御一見之上必々々々々無御失念御火中々々々々

正月中旬過には何と歟相決し可申に付其間之事なり

只々御駈引は同人之知る所にあらず兄等之任なり

彌御無事珍重々々小生も爾後臥床實に此節之寒冷にゐは左足も益不自由あたまも彌あしく誠に困却いたし申候乍去二度のひゞき故歟如一昨年突然暴に病魔も襲來不致候に付幸に防禦を密にして相防き居申候間先々御案意可被下候さては朝鮮一條も廟議彌決定之由にゐ（小生は此節不快に付巨細之事は不承候）廿日前後にゐ黑田出艦可致江華（朝鮮都近傍）ゐは來月中旬には是非罷越候次第に彼も相通じ有之申候小生も不快に無之候はゝ可成丈け平和之盡力可致と存居候處此度之處如何相成可申哉爲全國には只々無事を祈念いたし居候

（黑田は黑田清隆）

得共實に彼も野蠻に付如何之所行に可至哉眞に難圖候當年は幸に本邦も諸縣豐作米價も日々下落可致乍去來月中旬頃は右之次第に付如何可有之歟是は黑人の兄などに無之ゐは不相分候得共自然好機に候はゝ何と歟御謀略も有之候事と御察申候元小生などの白人之口出しいたし候譯には無御坐候只々兄之御方寸之事也然るに先日宗像直二郎當年大に損失をいたし候云々御申越實に同人事は氣の毒千萬に存候間萬一兄にも何歟御見込有之候ゐ御謀略有之候事に御坐候はゝ直二郎を御助け可被下爲其有之儘丈け極密入御耳申候直に此書狀は御火中御願申候先達ゐ兄之御手紙にもしらせ吳候樣との御內意有之に付前段大略如此に御坐候草々頓首

十二月十三日

尙々中野へ御面會之時よろしく臥床中に付是丈け相認候にも大草臥旁亂筆御容赦々々々

樂　兄　極々內密御獨披御火中々々々　糸山樵

（中野は中野梧一）
（樂は樂水にて吉富簡一）

二五八　山田顯義宛書翰　明治八年十二月十三日

昨夜は難有奉存候乍去御大敗北にゐ御氣之毒奉存候弟臥病中々連戰は無覺束候得共何卒鞍馬翁と今宵雌雄御決被成候ゐは如何乍微力御加勢位は可申上候草々頓首

十二月十三日夜　木門

山田　樣御內々

（鞍馬翁は奥平正介）
（山田は山田顯義）

二五九　岩倉具視宛書翰　明治八年十二月十三日

臥床亂筆奉恐縮候

尊書奉敬誦候昨日杉孫七郎罷越候間一通柳原殿などゝの相談之趣も承知仕候間愚按も陳述仕置申候先は御答まで申上候恐々頓首

十二月十三日

（柳原は柳原前光）

賤恙御尋奉恐入候どふも寒冷に付候ゟは腦足ともに一入あしく誠に困却仕候拜白

奉復　　孝允

岩倉公閣下　　木戸孝允

（岩倉は岩倉具視）

（松野は松野淵）

二六〇　青木周藏宛書翰

明治八年十二月十八日

亂筆高恕

頃日朶雲相達拜見仕候彌御清適に御奉職大賀此事に御座候さては御新迎ゟ御趣向至極妙也何卒めて度御調萬禱仕候松野婚姻も漸昨夜相濟大に安心いたし申候ものごと總ゟ百年ゟ後へ着目いたし不申ゟは決ゟ國の爲に利益を起し候事出來がたく松野ゟ事も其一部と相考周旋候ゟ弟丈けゟ寸志は爲社會に盡し候處めて度成就候に付大に安心いたし申候右ゟ次第に付兄ゟ御趣向も至極御同意候得共もしも御兩親方こけつけい々々と申樣ゟ御形樣御座候ゟはと少々御氣遣申候得共至ゟ御落着よろしく候間弟も安堵仕候（こつけい々々とは乍失敬雞に家鴨ゟ雛を育さしむるに有時得意に見水に飛込揚々と游泳候處雞は大氣遣ひゟ樣子にゟこつけい々々やか間敷申候）時勢は近轉候得共兎角老人は悟り兼候事世上一般に付弟も自然懸念候仕合彌於此は御安堵も至り候樣尙陳述候間御降意可被下候弟も新築いたし未移住は不致候是も友人どもよりおだてられ候ゟ少々張込候方にゟ御座候御歸朝ゟ節は新築御構までは御引受可申候十分に青蛇を御飄し可被成候承り候へは新細君御出生ゟ地方は余程大人種ゟ處と申事に御座候於于此宜哉青蛇大先生と益降伏仕候今日好便有之候由に付聊御祝し申出度如此御座候御歸朝ゟ上段々燒餅は騰拂可致候間青蛇力益御奮揮可然と奉存候草々頓首

十二月十八日　　孝允

（周蔵は青木周蔵）

周　藏　老　兄

明治八年十二月廿二日

二六一　吉富簡一宛書翰

必々誰にも御示しは御無用に候

必御火中々々々

病床亂筆御免々々

爾後御清安大賀々々さては先日内密一書差出定ゟ御一覽被下候事と存じ候兼ゟ内情御尋之趣も御座候に付只々兄へ而已内密御洩らし申候事に付必々其御含にゟ四方八方いづれへも御秘密申まで無御座御注意可被下候弟も于今臥床實に寒威之不同には甚以困却如此病骨にゟは自らあきれ果申候于時此度世外も朝鮮行之内決是は思之外之狂言なり弟も先達ゟ筆頭に不解盡一時困難に際し候に付ゟは兎に角一旦は自ら渡海と決心いたし其節は世外よりもやゝ間敷とゝめられ候得共元より決心之事に付此一幕

（世外は井上馨）

は一御奉公仕ゟ保養可致と相考世外之忠告にも不隨候處不幸にして如此不具之仕合遺憾之至御座候其に付候ゟも世外之此行思の外にゟ人世之事と申ものは何事もとりとめられ不申候いつも地獄に不言盡不解盡苦心而已其上當年も三度大病所詮難堪候に付是非此間に勇退些保養可致と存候實に當春浪華之一條も夢中之夢にゟ大失策其困難に澁者獨り弟にも相係り左候ゟ實地は伴食之仕合心中にも深く相恥ち居申御推察可被下候

一　中野は如何中野之爲には好機會爲山口縣には不仕合せ萩之士族ども

（中野は中野梧一）

は中野之高庇に預りながら萩之艱難を見て逃遁山口縣に候所詮縣令は不相勤公選にて撰らひ度などへらず口をたゝき候奴も有之候由屹度あたまを押へ不申ゟは不相成と存候

一　槇村へ之送りものは慥に御とゞけ乍御手數御願申候先は爲其草々頓首

（槇村は槇村正直）

十二月廿二日

御火中々々々

樂　兄内密々々御獨披　糸

（樂は吉富簡一）

□□帋御落手に候とき□□き候と御一書相願候

二六二　槇村正直宛書翰　明治八年十二月廿二日

先以御清適奉賀候過日は朶雲御投與別探索書合ゟ拜見いたし申候段其他山口縣ゟ事も申越態々爲其一兩人呼登せ申候元より萩人等ゟぐづ々々今日に不始事にゟ決ゟ何事もいたし候は出來不申候得共少年を皷動良民ゟ妨をなし候事は不少九州邊までも内密煽動者差出し候評判も御坐候乍去一塊に相成候ゟ爲軍候等ゟ事は決ゟ御氣遣に不及と奉存候東京も至ゟ靜謐に御坐候朝鮮へ黒田不遠内より參り申候どふしても損はありても益は無之事に付無事に有之かしと唯々希念いたし居申候

（黒田は黒田清隆）

毎々御手數奉恐入候得共此度張大光ゟ書幅表裝御願申上候に付千萬乍御手數極ゟ上手に御申付奉願候乍去京都ゟ骨董屋どもへは餘り披露不致内々珍藏仕候主意に御坐候間可成丈け骨董どもへも知れぬ樣奉願候茶の湯ゟ掛物などをおもに表裝いたし候上手が御地には居り候歟と奉存候

弟も去夏御別れ申候後七月下旬又九月一月餘終に又此度とも三度病臥實に困却仕候殊に當地大に寒威ゟ頓に增減有之候には病骨一言無御坐候先は御答御願旁如此に御坐候草々頓首

十二月廿二日

尙々國重其外へもよろしく奉願候拜

（國重は國重正文）

十八　眞老兄御内密　松菊

（十八眞は槇村正直）

（吉富は吉富簡一）

（下文は別紙なり）

本文相願候幅は大坂へ送り先收社吉富より御送り申候都合に付候間左樣御含奉願候

二六三　伊藤博文宛書翰

明治八年　土佐人　檜垣直枝

少警視相勤頻に河野敏鎌等と謀り合候なと申來り候ものも御坐候是も警視廳にゟ注意有之候はゝ可然と存候

新聞紙之事は決ゟ懸念無之事と奉存候新聞條例は可成丈け迅速は發行可然と奉存候

（鮫島は鮫島尚信）
（伊藤は伊藤博文）

今夕鮫島之招へ御出候哉

伊藤殿御直　木戸

二六四　槇村正直宛書翰

明治八年

何卒御内密に御配意被下候樣奉願候

御願申候儀別事にも無之候へ共不得止當時東京にがまんいたし住居仕候へ共餘命有之候はゝとふぞ西京に一生を終へ度東京はいつも如歳暮實に不面白候弟は別ゟ困却仕候然る處木屋町も狹隘之上餘地も無之出立前にも承り候へは丸太町を上るか下るか鴨川にそひ鷹司殿之屋敷被相拂候と歟承り申候何卒千金前後位に御坐候はゝ是非とも御世話奉願度偏に歎願仕候萬々一六つケ敷御坐候はゝ相對し候此邊にゟ雅趣之家は有之間敷哉乍去又家を建かゆるなと申候ゟは騷動に御座候間其まゝ住まれ候を望み申候可相成はとふぞ々々鷹司殿之處御配意奉萬願候每々失敬而已申出御面倒をかけ恐入申候

（槇村は槇村正直）

槇村樣御内披　木戸

木戸孝允文書

卷十六

明治九年

木戸孝允文書　卷十六

一　伊藤博文宛書翰　明治九年一月三日

亂筆高恕

歳末以來御多務中屢御光來奉謝候弟も引つゝき先手際克御坐候間御放意是願候さては過日御内話仕置尚世外よりも御談話いたし置候一條元より兩使無恙めて度歸朝は只管希望いたし候義に御坐候へ共自然鐵火ゑ二字に歸著候ときは如約是非とも宿志相遂申度委細は已に百も御承知ゑ次第に御坐候得共行かゝり齟齬出來候時は無限ゑ遺憾に候間何卒三大臣大參議へも十分貫徹仕候樣兼ゑ御配意奉願置申候元より御疎は無之事と愚考仕候得共兎角一念存于此候間態と尚煩御一覽申候吳々も宜奉願候草々頓首

（世外は井上馨）

一月三日　孝允

芳梅　様御内披

（芳梅は伊藤博文）

二　黑田清隆宛書翰　明治九年一月三日

先以御清榮に御迎歲奉賀候さては不日御渡海之由めて度御歸朝奉待候草々頓首

一月三日　孝允

尙々此品輕薄之至に奉存候得共御賦之驗迄に呈上仕候御笑留被下候へは幸甚之至に奉存候拜

清隆先生御直

（清隆は黑田清隆）

三　柏村信宛書翰　明治九年一月三日カ

亂筆御推覽奉願候可成丈ケ速に笠原にも御差圖之人誰にも御差越御賴申候

先以御清適奉賀候さて過日は御懇書御示奉謝候于時三條家負債一條に付於政府も余程苦慮周旋有之候由にて不仕候へ共伊藤なを以も内相談御座候弟は今以出勤不得仕候に付巨細は承知岩倉大久保なども頻に盡力いたし申候其に付高輪樣へも内賴談之儀御通じ申上吳候樣との事に御座候細川家と高輪樣とより一部分つゝ拜借其餘之處は朝廷より御助力有之由に御座候此邊御直に御相談不仕ては難相盡候間老臺には御多務にも可有御座と奉存候間笠原にも御差越被下候はゝい曲其趣可申上候兼ては高輪樣之會計其外御家風之邊も元より入々申陳置候得共此度之一條は如右行がゝりにては一統より高輪樣へ申上吳候樣との事に御座候間其主意御通不申ては不相成都合に御座候間此段御承知可被下候先は爲其草々頓首

一月三日　孝允

信　老臺御内々

（三條は三條實美）（伊藤は伊藤博文）（岩倉は岩倉具視）（大久保は大久保利通）（高輪樣は毛利元徳）（細川は細川護久）（笠原は笠原昌吉）

（信は柏村信）

四　伊藤博文宛書翰　明治九年一月五日

亂筆御推讀是願候

過日は御光來奉謝候いつも失敬而已相働申候御容赦可被下候さては三條家金談云々及談論終に一萬圓丈け無利年賦にゐ可用立との事に過半相決し格別此餘に異論は出來いたす間敷と相考へ申候付ゐは細川ゑ方もどふぞ同樣助力ゑ運ひに相成早々一片付け候樣御盡力有之度奉存候岩大臣へも此段御通じ可被下候○朝一條于今報知無御坐候哉和戰ともに何と歟報知無之ゐは不相成事歟と存申候無音に付ゐは激風に沮られどもは不致歟彼是掛念仕候樣子相分り候はゝ御一書御願仕候先は爲其草々頓首

（三條は三條實美）
（細川は細川護久）
（岩大臣は右大臣岩倉具視）
（朝一條は朝鮮事件）

一月五日　　孝允

博文　樣内密御直

（博文は伊藤博文）

五　伊藤博文宛書翰　明治九年一月五日

前略兼ゐ世外よりも御噺仕置候義可有之歟と奉存候小生も其邊ゑ義承居候事も有之候處今日則日下義雄なるもの來訪洋行ゑ宿志精々速に相達度由にゐ小生よりも尙又申上呉候樣被相賴申候昨年世外より大隈とも相談いたし有之候樣申居候間被差越候ゐ前途御見込ゑ有之候義に御坐候はゝ御配意相願申候日下も從來承知いたし候ものに付依賴ゑ趣難辭如此御坐候草々頓首

一月五日　　孝允

博文　樣御内々

（世外は井上馨）
（大隈は大隈重信）
（博文は伊藤博文）

六　青木周藏宛書翰　明治九年一月七日

臥床亂筆御推覽可被下候

過日御送りもの云々未到着いたし不申御高意奉謝候

先以御清安奉賀候先達ゐは朶雲御投與漸十二月御取替ゑ金圓も陸軍省より相渡し候に付則大人へ御渡し申候さて本邦近況も逐々御承知に相成候

事に奉存候朝鮮へも黑田と井上馨罷越候都合に相決し申候先年來之行が
丶り有之紛紜之末又江華一條に付候ゆは其儘差置候譯にも至り兼（此際島津其他）
之云々にゆ不得止情實も有之申候　申候何卒此上は希望通り都合克運かしと只々希望仕候弟
も去年七月之末九月にも三十余日も病臥近來弱體に相成餘命も有之敷と
相考候に付末期之御奉公に渡海可致と相願內々其用意もいたし居候處十
一月廿三日より又々臥床腦痛烈敷左足不自由如先年に可立至と氣遣候處
漸々鎭定昨今は且々自由も相叶申候乍去彼是五十日も臥床候事に付甚困
却仕候今日承り候得はとふ歟扇洲も出立いたし候由歸朝之上は緩々と近
況も承知可致と相樂居申候御留守にも皆樣至極平安御放意是願候先は爲
其如此に御座候草々頓首

一月七日

于時御祝詞申上後れ候めて度御越年と御祝し申候○池田其外へも可然
御致意御願申候○朝鮮も朝鮮海航各國船同樣航海自由別に江華邊へ湊
之一ケ處も開き候位に相成候得は重疊に御座候以上

（黑田は黑田清隆）
（島津は島津久光）
（扇洲は品川彌二郎）
（池田は池田謙齋）

青蛇老兄內密御直　　松菊

（青蛇は青木周藏）

七　神鞭知常宛書翰　明治九年一月九日

爾後彌御壯榮大賀之至奉存候然は例之一條に付委敷參
朝之上評議致候付ては一兩日中には其光景相定り可申歟と愚考仕候乍去
實に百憂之至に御座候甚煩念仕候彌不疑之境に立至候樣子も相見候ゆは
一書可呈候兎角天下之議論如山承知仕候先は一應入御聽置申候爲其草々
頓首

正月九日　　孝允

神鞭知常殿御直折

八　伊藤博文宛書翰　明治九年一月十二日

亂筆御推覽

意外之大雪冷度暴下候處彌御清安大賀々々頃日は屢御光來奉謝候小生も過る八日天氣も至極平和に付若林へ墓參仕候處少々之疲勞は御坐候得共別に差響も不仕且昨今之冷寒にも且々我慢出來申候間御放意是願候病氣も先此度之處は鎮靜之始に可有之と相考へ申候于時井上（井上は井上馨）よりも頃日來書尙如御承知電報も有之先々無滯出發御同祝申候此上之處如廟算相運かしと萬禱仕候和戰とも廿日を不出相分り可申自然火と相決候上は逐々懇願仕置候義無遲躑無齟齬速に御下令有之候樣只管萬禱之至に御坐候歳々陷病弱實に余命之縮蹙も自悟仕居候仕合萬々一も齟齬御坐候ゟは生涯之大遺憾に御坐候間兼ゟ大久（大久は大久保利通）などと之處も御疎は無之事と奉存候得共些凝も無之樣御高配御願仕候末期之願情幾應も御了察可被成下候御願申候草々頓首

一月十二日

尙々寒梅一朶御贈申候玉鮮に御挿相成候はゝ幸甚々々癖作爲御一笑備一覽申候以上

芳梅（芳梅は伊藤博文）樣御内密　孝允

九　柏村信宛書翰

明治九年一月十三日

亂筆御推覽可被下候

先以御清適奉賀候今日は參上可仕之處御承知之通未外出仕かたく候間御無禮申上候に付可然御取成奉願候さて又過日御内話も有之候に付杉宍（杉は杉孫七郎）ともとも昨夜も相談仕候處到底往々之御不和にも相成候ゟは却ゟ不宜と奉存候に付檜（宍は宍戸璣）等も斷然休息被仰付候方可然（檜は檜崎豐資カ）との衆評に御座候間今日杉宍より御直に可申上候と奉存候乍恐公（公は毛利元德）にも御聽取申上までも無之御事と奉存候付ゟは彼是老臺にも御配慮之御事と奉存候得共是等は御容赦無之ゟ可然と奉存候乍去此餘之處は

上々樣方も御注意被爲在御家内中は且々御不自由も不被爲在春風和氣之
御域に被爲移候樣萬禱仕候尙拜靑縷々可申上候草々頓首

一月十三日　　允

柏村老兄内密御直

（柏村は柏村信）

一〇　吉富簡一宛書翰　明治九年一月十四日

亂長文御推讀可被下候

新禧めて度御一家御揃にゐ御越年萬々御祝し申候弟はそれに引かへ仰て
も伏ゐもめてたからず且々馬齡を一つを不得止相重ね申候是亦不目出度
之一つに御坐候御笑察可被下候さて東京之近況は世外より御承知と存申
候同人も寒天之折別ゐ苦勞第一に此度之一條不見火して談判相調ひ第二
には身體堅固只々祈念いたし居り申候萬一も不幸にして銕火之域に至り
候て實に烈速結局候事第一と病間にも乍不及種々工夫いたし居申候何卒

（世外は井上馨）

本邦にも此度之幕を決末といたし已後は情實行がゝり等之諸病を一掃い
たし東京は兎も角も田舍之お百姓や其外困窮士商之世界を回顧にゐ漸々
實事之文明境に進步候樣有之度と而已旦暮只々祈願いたし居申候弟も汚
此職居候得共赤心之浮薄なる故歟右等之見込は兎角難貫一跌再跌深く慙
愧いたし居申候于時山口縣は御同樣に父母之地にゐ尤同助同援之義務は
難免昨年も乍不及前縣令始諸氏之意見に隨ひ歸縣之折聊盡力も盡し候得
共歸水泡候ゐ今日一益も無之事御坐候得共於愚考は只管此上も我縣内之
事は兎角に殘夢之間にも帶來候ゐ前途之事を案し申候廢藩後も幸に中野
令入縣にゐ今日まで之事も不一形盡力實に人民之幸福いかはかり歟眞に
弟等も竊に相喜ひ居候仕合然るに不圖此度辭職に相成候も抑留之心事如
山に御坐候得共是亦不承知不得止之次第にゐ如何とも難致付ゐは此度兼
ゐ中野令より内々申立に相成居候關口氏なるもの奉命然るに將來之處余
程誠心を盡し助援もいたし不申ゐは自ら中野令之時と時勢も亦相違候邊

（前縣令は中野梧一）

（關口は關口隆吉）

も有之一入六つヶ敷事と相考たとへ誰の身に引かへ候ゑも分明なる事と存申候自然も今日にし傍觀候樣之心事同志中に御坐候ゑは從來中野令之高意も水泡に屬し候而已ならず御同樣に縣内兄弟に對し候ゑも不相濟儀は不待言付ゑは第一協同會社之初發設立もい曲御承知之通實に力之及ひ候丈けは御同樣に相盡し不申ゑは御同樣之義務も不相立已に過日も御書翰にも有之候通先收社も鎖閉に付候ゑは是非とも協同會社に御加入有之度一昨年も世外へ相論し候末昨年六月頃よりは必其邊之處も盡力いたし候約束に御坐候處不得止次第にゑ遷延に相成申候たとへ一人一己之自由と申もの御坐候とも是は只一人一己之事にゑ必對人候ゑは其義務無之ゑは不相成況哉縣内之蒼生に對し中野令之時には盡し別令之時には自然も傍觀之譯に相成候ゑは縣内人民之不幸可如何付ゑは毫厘も無御遲疑協同會社中へ御加入之儀直ちに御決心可被下候逐々御承知之通弟等も今日之苦界心事遺憾至極之儀も御坐候得共一因果と不得止明らめ候事も不少御了察可被下候自然も御故障有之節は如何樣も必至御助勢可申候縣内之事も在京人中同敷父母之地に御坐候得共世外之外同憂同歎候ゑ迅速談合之相調候もの無之此邊は先にもい細御承知なり且兄之所有地も縣内之もの自知候事に付候ゑは一體之都合も可然候間元より御二念有之儀は無之と御疑不申候得共近日關口氏へも依頼候に付ゑは厚く御聽に入置不申ゑは甚以不安候間此段縷々申進候先は爲其如此御座候餘は永日と申縮候草々頓首

一月十四日

尚々十一一兩日之積雪當地は二尺許も有之昨今寒威凛烈乍去弟病體格別相障り不申御放意可被下候貴地は如何于時本文縷々得貴意候儀は元より御遲疑無之事と存詰居候に付左樣御承知申も疎に可存候所詮色男一條對美人候ゑ萬々六つヶ敷何卒向後は縣内爲人民色男に吳々御願申候早春餅梅之一作あり備御一笑申候

一枝闘折取　餅裏纔占春
出處何論地　氷心不染塵

樂水兄御内密　松菊

（樂水は吉富簡一）

一一　柏村信宛書翰

明治九年一月十五日

亂筆御免尚又此間に拜青仕候ゑい曲相窺可申候拜

（杉は杉孫七郎）杂雲拜見仕候昨日御投書之御末文少々相解兼候に付杉より承り今日郵便を以御答申上候仕合今尚又分明に承知仕候ゑ安心仕候彼是御配神と御察申上候さて又狛氏御安產めて度奉存候不取敢御喜にも可差出之處今日は晩景にも相成候間御無沙汰申上候よろしく御致意御願仕候草々頓首

（狛は狛林之介）

一月十五日　孝允

（信は柏村信）

信　老臺御内答

一二　柏村信宛書翰

明治九年一月十五日

昨日は杂雲御投與拜見仕候御末文之家扶へ面會云々彌休息被仰付候事に御座候得は差向之事には無之いかゝ哉と奉存いつれ杉も昨夕罷越候事に付可承合と奉存直に御答も不仕果ゑ昨夕杉來訪に付い細承知仕候處彌休息被仰付候御都合に御決定被遊候由付ゑは今更檜等と色々談合候ゑも無益歟と奉存候乍去今後之處乍恐

（杉は杉孫七郎）

（檜は檜崎豐實）

御奥樣にも御注意被爲在且御左右之事は且々御不自由無之樣御配意無御座ゑは不相成吳々も御一家中春風和氣之氣象に復し候樣奉萬禱候其ともに檜等之儀に付尚御氣付も御座候はゝ相窺可申候

（御奥樣は毛利元德妻）

弊宅一條い曲御答之趣承知仕候實は弟往々維持も六つヶ敷候間相應之處へ引籠度然るに場所柄も普請も尋常に無之且

皇居へも近く往々之御都合にも可有之歟と奉存實に他へ讓り候も些殘念に付他よりはたとへ下直にゑも自然御用に相成候へは本懷と奉存婆心よ

（黒田は黒田清隆）り申上試候事御座候黒田之方よりも屢罷越申候未直段は一定不仕候先は爲其草々頓首

一月十五日　孝允

信　様御内密

（信は柏村信）

一三　伊藤博文宛書翰　明治九年一月十五日

（世外は井上馨）世外神戸より之書狀一昨夜相達申候其書中に於山口縣も裁判官之處縣内種々之情態も有之一統も甚掛念いたし居候よし自然此末關口なども隔意相生じ（眞正直に御座候へは委細も有之間敷なれ共）紛紜爭端有之候ゟは却ゟ今日よりも惡敷可相成付ゟは精密に可成丈御人撰有御坐度山田へも申越候處貴所にも御見込御坐候由に付早々申上置吳候樣申越候間不取敢御耳置申候草々頓首

（山田は山田顯義）

一月十五日　孝允

博文　様御内直

（博文は伊藤博文）

一四　三浦芳介宛書翰　明治九年一月十八日

亂筆御推讀是願候左候ゟ必御火中々々

新禧芽出度御歸縣後彌御壯剛に引つゝき御盡力と大賀此事に御坐候弟も少々つゝ快方に付御安意是願候乍去根治と申事は所詮六つヶ敷候間一時倖僥と明らめ申候井上も當節は彼地ゟ着候事と存候何卒無火談判に歸し候へは無此上神戸よりも入々申越い細對州と韓地より巨細に早々事情申越候都合に付相待居申候于時關口も一兩日前出京不日出立いたし候由浪華にゟ少々は滯留いたし可申同人も隨分難儀之舞臺中にゟ難儀幕へ出候樣之ものに付何卒懇切に御助勢申迄も無之候今後は實に中野之時よりも惡方と相成場合多く可有之と存申候さて此頃頻に傳承候處にゟは屢々九州邊之帶刀連萩表へ入込學校（讀書場歟と相考申候）へも無袴無刀を禁し（無袴は禁しるとも無刀を禁し候ゟは讀書場彌不都合なるもの歟と必竟爲萩人歎息いたし申候）逐々士族なとを煽動候由主として前原奥平等

（井上は井上馨）

（關口は關口隆吉）

（前原は前原一誠）（奥平は奥平謙輔）

（木梨は木梨信一）（吉田は吉田右一）

出席と申事に御坐候眞に可懸念ほとの事に御坐候へは第一木梨吉田尙貴兄よりも御報知有之候事と相考へ候得共兎角萩城之事は却て山口には迂遠之事も自然不少何卒時々事情御知らせ御頼仕候尙九州其外より入込候ものは屹度探偵等を以姓名出生之縣其族等も一々御詮儀有之乍御手數度々御示被下度諸方へも逐々着手相成居候に付左候へは其筋に委敷相分り候て取締りを爲にも一段に御坐候木梨は過日病氣之由に付大に案し申候吉田には馬關へ頃日出浮相成候由此邊も井上より承知いたし申候先は爲其不取敢如此御坐候餘は又々可申上候草々頓首

（芳は三浦芳介）

一月十八日

允

尙々木梨吉田へも書狀出し不申候間可然御致意御願申候萩城之近情御報知且帶刀連入込候ものゝ姓名其外吳々御探偵御申聞可被下候以上

芳　兄

極密御直

一五　井上馨宛書翰

明治九年一月十八日

亂筆高恕

先以御清剛大賀此事に御坐候今日傳報御坐候由にて明日より野靖御出先へ被差越候に付只今野靖來訪電報之由承知仕候い細は野靖より御承知之事に付何も不申上候寒天之折別て御苦勞千萬電報之樣子にては弟等平生希望候所之無火談判は所詮六つケ敷樣被相窺殊更に御苦慮と御察申候弟も少々つゝ快方御放意奉願候不幸にして銕火之域に至り候はゝ御一同に奔走仕度と其而已此頃は相考へ居申候實に此境に至り候上は內外之爲實に決局肝要と存居申候是は難盡筆頭候間今日不申上候

（野靖は野村靖）

○神戸より之朶雲相逢候に付裁判官之事は早速イ藤へも申越置申候關口も兩三日前出京候事に付協同會社之事も入々相談し置候實に老兄始爲往々人民に御盡力相成候事中野一代にて瓦解候ては實に殘念千萬に御坐候間力の及ひ候丈けは長く防長之人民幸福を得候樣盡力は不仕ては不相成

（イ藤は伊藤博文）（關口は關口隆吉）（中野は中野梧一）

事と奉存候野靖は只今より歸家明早天より出立に付眞之一筆相呈申候時下格別御自愛第一に奉存候草々頓首

一月十八日夜

黑田氏へも可然御傳言奉願候

（黑田は黑田清隆）

世外老兄内々御直　　孝允

（世外は井上馨）

一六　柏村信宛書翰　明治九年一月十八日

（井上は井上馨）

○昨日井上朝鮮より出仕し之書狀到來當時は釜山之碇舶此邊は無事之由に御座候へ共紅華邊は一向不相分どふも尋常には有之間敷歟と被相察云々御坐候尤世間へは御内々御序に御内密被仰上置可被下候自然鐵火之域に至り候得は此一決局迅速相定り不申ゐは浮沈之際と愚考仕候拜

（此書は宛名署名及ひ月日を闕く明治九年一月十八日木戸孝允が柏村信に贈れるものなり）

一七　吉富簡一宛書翰　明治九年一月十九日

臥床中亂筆御容赦可被下候世外之事も内々頻に煩念いたし申候鄕導も六つケ敷歟と相察申候乍去世間へは必々御内密々々々

頃日一書相呈候處御覽被下候哉是非とも協同會社へ御關係之儀は決ゐ難御逃儀に付たとへ御持說御坐候とも必々御扛け被下候ゐ斷然御承託是祈候於弟等實に山口縣下之爲には人間之公義におゐては申までも無之對先君候ゐも力之及ひ候丈けは元より盡力不致ゐは不相成前途之事を想像候へは此際こそ尤肝要之時にゐい細は過日縷々申進候通に御座候間決ゐ御異論可有之事とも存不申候得共分明なる御答を一日も迅速に承り不申ゐは安心不得致實に萩城之馬鹿士族大に時勢に反對いたし　先君之御主意に悖戻候ものも有之候歟に相考候へ共是は相手には不相成實に良民なり良士族を外にいたし候譯は毛頭有之候ゐも不相濟吳々も爲將來縣内之事を擲重安全に慮り人民一般之幸福は希望いたし候次第にゐ是は寢ても難

（先君は毛利敬親）

忘此邊は從來之行がゝりにゟ世外なり及兄なり弟等は忘却候ゟは不相成
次第候間厚く御勘辨被下候ゟ御同意被下候段迅々急々御答御願申候左候
へは弟も大安心いたし申候縣内之事なりとも一安心いたし候へは心中之
一愉快御想察可被下候此分明なる御答參り候まではたとへ幾度御書狀參
り候とも御答は不致此事より片付度是又私事にあらず吳々も御推察可被
下候關口も頃日出京不日山口縣へ向發向之都合に御座候同氏へも協同授
產之事は爲將來厚く相願置申候懸念之餘尙又得貴意申候草々頓首

一月十九日夜　　糸　米

（矢原は吉富簡一）

矢原老兄　内密御直披

一八　伊藤博文宛書翰　明治九年一月廿三日

（野靖は野村靖）

華墨拜見仕候先以御清適御奉職大賀之至に御坐候釜山より之書狀慥に落
手仕候過日野靖被差越候御樣子は同人より委曲承知仕候同人も不日渡韓
候事と奉存候
如貴諭過日三條大臣御來訪種々御噺も御座候得共内願一條も身上之義に
付具に陳述いたし候譯にも參り兼兼ゟ尊公始御願仕置候義に付可然御評
議奉願と申上置候間乍此上宜敷奉願候先は御答迄草々頓首

（三條は三條實美）

一月廿三日

尙々自然釜山へ幸便御坐候はゝ御示奉願候于時度々之大雪乍去諺に云
豐作之兆どもに御坐候へは無此上と病體も聊りきみ申候且格別障りも
不仕候間御放意是願候拜

博　文　樣御答　　孝　允

（博文は伊藤博文）

一九　吉富簡一宛書翰　明治九年一月廿五日

亂筆御推讀然る上は御火中々々々
過る十六日十九日兩度之朶雲廿日廿四日兩度相達拜見いたし候彌御清剛

珍重々々尚縷々御心情御示に御座候處人生兎角得意地に而已奔走候事所詮六つケ敷況哉同縣ゑ人民上に關係候義務に付候ゟは抂ゟも御盡力無之ゟは不相濟愚按自然御苦情有之候歟と苦慮いたし先日來朶雲と駈違ひ兩度書狀出し申候一々御覽被下候事と存申候今日御同樣に同縣人民に相對し候ゟ盡力候所以一入盡さねはならぬ義務い細其節申進候通尚又別に御諭し申候程ゑ儀も無之實に兄獨り區々ゑ御嫌疑御厭强ゟ得意ゑ地を御求被成候より節角人民一般ゑ爲め幸福ゑ一場其端相開け候も瓦解に至り候儀に付たとへいか樣御苦情有之候とも御勘辨無之ゟは不相濟事と奉存候元より弟も昨年歸縣後不本意ゑ事にも相考候に付縣下ゑ事に付世外なり中野なりへ對し候ゟも强ゟ辭表もいたし度と幾度も存込候事も御座候得共尚一層眞理を推窮候得は世外なり中野なりは申まても無之不相濟道理自ら現然候に付幾應推考候ゟも同縣人民ゑ事に御座候へは是非々々御互には不被免候間此段は十分に御承了被下度兄ゑ御得意ゑ地には決ゟ御同

（世外は井上馨）
（中野は中野梧一）

意不致候別事に御座候得は何事にゟも兄ゑ御心事に同意いたし候へ共是等ゑ事は何卒大體を御推考被下度付ゟは協同社頭取ゑ名義を以勝間田被仰合必御配意可有之候事此上は一歩一厘も此一條に付候ゟは御相談に預り不申候吳々も御互ゑ不被免眞理を御推窮被下此一條に付御異論ゑ書狀は丸々最早御謝絶申候自然御苦心ゑ事出來候はゝ乍不及歸縣候ゟ何時も御手傳可申候先は爲其草々頓首

（勝間田は勝間田稔）

一月廿五日夜

尚々周布金槌も歸朝いたし申候同人兄於英國病氣不幸ゑ至氣の毒千萬に御座候此度是も金槌一同歸朝はいたし申候○世外釜山浦よりゑ書狀彼地ゑ模樣も些六つケ敷相察候世間へは御內密々々々

（周布金槌は周布公平）

樂　水　兄御內密々々々

松　菊

（樂水は吉富簡一）

二〇　槇村正直宛書翰　明治九年一月廿六日

亂筆高恕

過る十七日ゟ朶雲一昨日落手拜見仕候先以御清適御奉職奉賀候弟も且々消光去年ゟ病氣も根治と申譯にも參り兼候得共頃日ゟ處にゟ漸々鎭靜いたし候都合に御坐候間御放意是願候

一　如貴諭府下も至極靜謐左派ゟものは頻に煽動はいたし候由不知世間ゟ士族どもは本尊ゟ樣相考士族復舊の爲に奔走候もの不少由時勢ゟ迂なる可憐事に御座候井上より釜山十八日仕出しゟ書狀是亦一昨相達申候釜山邊は格別異情も無之由に御座候得共京城邊ゟ模樣は一向不相分想察候處にゟは隨分難澁と相考へ申候自然不幸にして銕火ゟ域に至り候得は迅急決局相着不申ゟは內外ゟ不幸不一形此一條も先年來ゟ引かゝり不容易艱難相生し且亦已にいたし方も無御坐候得共此一局相濟候はゝ行がゝり情實等ゟ病氣を一掃し內地ゟ實政に專ら方向相立候樣にと只々萬禱いたし申候何分にも富國ゟ基礎相立不申ゟは一時ゟ僥倖御座候とも百事自ら

（井上は井上馨）

瓦解に至り申候

一　忠太郎一條云々被仰下誠に難有奉存候何分宜敷御願申候平民にゟも詰りよろしく御坐候へ共木戸姓を相名のらせ度愚考仕候處よき都合は有之間敷哉と頻に奉存候乍此上どふぞよろしき樣御配意只々御願仕候

一　書幅表裝ゟ儀被仰下實に御繁務ゟ中每々種々ゟ御願仕甚恐入申候可然御願申候御交易に何歟東京へも御用御坐候はゝ無御容赦御申越御願申候

一　御地弊宅入費等ゟ儀に付態々い曲御示承知仕候丸々御依賴仕居候事に付いか樣とも宜敷樣御存分に御願仕候

一　貳分判ゟ事兎角御答も延引仕候於御地御拂被下候ゟよろしく御坐候御序ゟ節可然御願申候

一　大人始御壯健に御出ゟ由誠にめて度奉存候御新築額面云々い曲承知仕鋏面皮ながら任貴意早々相認御送り可申候

（忠太郎は木戸忠太郎）

一　山口縣々令中野梧一も先年來之内願にゐ終に此度辭職靜岡人關口と（關口は關口隆吉）申人先日奉命不日出立いたし候都合に御坐候昨年歸萩之節乍不及種々盡力いたし其節は束髪帶刀も日に減し申候處近頃煽動者有之候由にゐ俄にさび刀を取出し候樣之輩も有之候歟之由如御承知萩人どもゝ越境擧事候樣之氣魂も無御坐候へ共必竟自分之不幸を自分に釀成候樣成行愍然之至に御坐候

一　左派之ものにゐ薩人之少年暴客を煽動いたし大久等を（左派は島津久光）（大久は大久保利通）（弟名も書付有之候と歟も申候可笑々）殺害候企有之何歟其證跡を被見出警視廳之方（是も專ら薩人とも詮儀いたし候由に御座候）にゐ盡く捕縛委敷は存不申候得共六七人にも相成候由山本克なども其中に居り申候薩人には戊辰前後より國事に盡力候もの左派と申ものは一向無御坐候故却ゐ薩人どもの探索行屆候樣被察申候乍然前申候通世間之無智士族等爲糊口被煽動候輩は不少候海枝内田など歟其謀主と相見へ申候先は御答旁如此に御坐候乍毫末大人始御滿堂樣へ可然御致意御願申候其中時下御自愛第一に奉存候草々頓首

一月廿六日

尙々過る廿三日に又々積雪三四寸廿二日は快晴候ゐ其後始終ちら々々と降り今日なども滿地如白氈隨ゐ寒氣も嚴烈御地は如何

十八眞老兄内密御直　松菊

（十八眞は横村正直）

二一　杉孫七郎宛書翰　明治九年一月廿七日

亂筆高恕今日は何卒風呂場に無之ふとんの中にゐとつくりち八ども被成候樣奉祈候

昨日來之風雪病體は頓に降伏仕候老兄御起居如何益立壞之思食勃々ならんと竊に御羨み申候弊宅一條于時切迫別に相應之土地も無御座候間宍翁之筋向へ建築と内々決定仕候付ゐも千萬乍御苦勞快晴次第位置御見合被成下候樣御願仕候建家間取等之處も愚按にゐひねくり居申候間是亦此上（宍翁は宍戸璣）

之御工風御願仕候先は爲其草々頓首

一月廿七日風雪

（周金は周布公平）
（槇村は槇村正直）

尙々周金は昨日出立仕候哉○槇村之老人新築いたし先達而來屢樓名一額を賴越申候河原町故東山も木屋町之連屋にさゝへられ見へ申間敷何歟老人養生に付相應之名目は有御座間敷哉何卒御氣遣被下御示奉願候

拜

立　墩　老　兄御內々　　松　菊

（立墩は杉孫七郎）

二二　林勇造宛書翰　明治九年一月三十一日

（關口は關口隆吉）

亂筆推讀是祈吳々も無腹臟關口へも談論有之候はゝ則人民之幸福と存申候

（中野は中野梧一）

新禧芽出度貴樣彌平安御加年と珍重此事に御座候さては舊年部坂甚兵衞出京之節入々御手帋尙傳言之趣もい細承知いたし申候然處中野も已に昨夏以來數度抑留候末終に其節は決心に而上坂且段々內情も有之不得止次第に付一統之願通りにも至り兼其邊は拙者どもまで殘念に候得共如何とも難致付而は兼而中野より申立居候人物に而同敷靜岡縣關口隆吉と申仁此度奉命山口縣へ致出張候此人柄も拙者兼而承知いたし德川家浮沈之際にも拔群盡力候人物に而尋常之俗吏に而は決而無之然處中野今在勤中は地租一變等之事も有之元來

朝廷上より之御詮儀に御坐候得共兎に角同人在勤に而一入盡力にも相成人民之幸福不一形其上士族等之事も精々寬容に周旋有之一般之人望も御座候處今度之處に而は不得止順々一體之條理にも照準仕候樣不致而は諸縣一般にも相かゝわり同敷人民之爲に盡力候とも時之都合に而自然善方と相成り又惡方とも相成り候樣之氣味有之御奉公とは乍申當人之損得は大に有之候ものに御座候決而關口なる人も不正之事をなし人民之事を疎略に相考候人物には無之候得共時勢に而如中野始より人民之戴き候事如

何可有之哉と存申候付ゐは第一貴樣は不及申部坂其外諸區之區戸長始少しも無腹臓存分に何事も關口へ對し不審之事は相論じ又爲人民氣付も有之候はゝ十分相談し候儀肝要と存申候其上にゐ道理之有之候處へはは隨ひ不申ゐは不相成儀は人間一統之義務に御坐候間元より其邊は輔賛助力無之ゐは不相濟候關口も不日出立いたし候に付爲其一書如此御座候其中時下御用心第に候草々不一

一月卅一日

尙々部坂へも可然御傳言賴入候尙其外へも本文之趣意御含被下致意被下候樣相望み申候○寒中縣内は天氣如何東京は數度之大電二三十年には無之と土人語り申候拙者も昨年來不快實に病骨には此寒威に隨分困却いたし候得共當年豐作之兆にも可有之歟と大にりき見居申候御一笑々々

勇藏（翁平安御内々）　孝允

（勇藏は林有造）

二三　吉田右一宛書翰　明治九年一月

先般縣令中野梧一辭職職退縣に付候ゐは協同會社之長之儀も及斷候付ゐは今後貴殿同社々長御勤務相成之儀及御相談候に付ゐは中野梧一同樣御擔當有之度此段申進候也

明治九丙子一月

吉田右一殿　木戸孝允

二四　尾崎三良宛書翰　明治九年二月二日

亂筆御免御火中々々

朶雲拜見仕候過日は御光來奉謝候いつも失敬而已相働も何も御容赦是願候

（三木は森寺常徳）

一　御内話之三木一條其後内盡力仕見候處則御書中にも有之候通弟は是迄之事一向承知不仕候得共御聞及も御座候通逐々政府中にゝも種々評判有之候由にゝ宮之方にも侵潤いたし居今日強ゝ盡力候得は全く相公之隱に庇援被成候樣に相響き余程困難之極に承知仕候間折角可申上候ゝ御相談可仕と存居候處に御座候御書中之趣と符合仕候昨日も三木より御噂も御座候由にゝ書狀も落手實に氣の毒にも相考候に付どふがなと節角相考候へとも此次第に付如貴意辭表之外いたし方有之間敷尙其中拜青何も相窺可申候先は爲其草々頓首

二月二日

尙同人へ自然御逢御座候はゝ可然御傳言御賴申候どふぞ同人も今後之處注意候ゝ何事もはでに不致小心之處第一に御座候先年來段々弟もよそ耳に承り候へ共眞に三木は滿金家と相心得意にも不仕候處近來之次第にゝは實に殘念に千萬御座候拜

（三は尾崎三良）

三　大　兄　内密御答　　允

二五　三浦芳介宛書翰　明治九年二月七日

大亂筆御推覽被下候ゝ御火中是願候

過日は朶雲御投拜見仕候彌御壯剛御盡力珍重々々さては萩城之形勢も不穩之由終に見血病に至り候ゝは實以可憐之至り何卒其場に不至樣たとへ兩三之巨魁は着手相成候とも一統其毒を不受樣に祈居申候岩國德山等へも波及候ゝは尙更往々縣治之爲めにも不宜其邊は被仰合御用意有之度奉存候關口縣令も已に出立致し候に付不日着鴻可致一體之事は相話し置候間着縣之上不驚樣靜着に御談をも被成右邊之都合も御助力萬禱仕候つまり條理を以所致候外水火之中といへどもいたし方無之候に付其邊御含置可被下候且又井上馬關釜山等より之來書之中にも申越候處探索等之儀は十分御着手に相成居候哉つまり前途之用意に確證を押へ置候事肝要に付

（關口は關口隆吉）

（井上は井上馨）

精々綿密に御探索屹度確證御詮儀可被成候且他所より入込候ものゝ姓名縣名是亦一々委敷御詮儀有之度無左ゐは其脉胳相分り兼申候山口よりは却ゐ内務なとに萩城ゑ樣子も委敷相分り居候事有之申候于時諫早ゑ事段々御申越實に感服かゝる時こそ確乎不屈に無之ゐは男子ゑ甲斐は無御坐候所詮萩城ゑもの越境擧事候事は出來不申候得共節角前途を思ひ着實に授產ゑ事なと企候もの哉又は良民ともの妨害をなし終には同血病中へ陷れ候樣ゑ事生し候ゐは誠に以愍然ゑ極にゐ弟等も爲故國一人ゑ不幸人も無之樣にとは別ゐ平生難忘候事に付兩三巨魁ゑ爲め不容易不幸波及候歟（良民へ）と懸念いたし候得は不堪歎息候弟は先年脫隊ゑ時にも凝り居り是も必竟（其節）ゑ政府ゑのかりより終に如此立至り爲其幾百ゑ人命をも亡し候次第何事も淺河を深度致し候心得肝要と相考へ申候○佐々木も過日出立いたし申候大分爰元ゑ事も相分り候樣存申候然し萩城ゑ事は誠眞ゑ決心を以所致不致ゐは到底六つヶ敷と存候○東京は至極靜謐朝鮮ゑ事も于時何とも不（諫早は諫早作次郎）（佐々木は佐々木男也）

申來節角如何哉と存申候○福原も此頃は至極謹慎に勉强候樣相見へ申候（福原は福原又市）其中御自愛第一奉存候草々頓首

二月七日　允

芳　兄内密御直　御火中々々々（芳は三浦芳介）

二六　杉孫七郎宛書翰

明治九年二月八日

亂筆高恕

今朝拜青後歸宿仕御示ゑ朶雲拜誦寫眞は宍戸へ持參仕候然處今日は宍翁亡細君一周にゐ諸友被相招いつれも靈前に寸志ゑ備物等いたし野村山田其外皆々罷越申候然るに老兄よりは一向何たる御沙汰も無之御案内は第一に申上候由今朝も新細君一條に付候ゐは何歟一筆御示も有之候に御坐候得共今日御案内仕候事には少しも不致關係付ゐは御忘失に間違有之間敷といづれも想像仕候いかに新開笠墩等專務に御周旋有之亭主ゑ好物を（宍戸は宍戸璣）（野村は野村素介）（山田は山田顯義）

客に施すと申膽有之候にもせよ餘り甚敷と御評し申上皆々御來杖を相待居申候何卒此書御一覽被下候はゝ早々二人曳〻人力御下命迅速御出浮奉待候爲其草々頓首

二月八日

（以下切斷）

（此の書は宛名署名を闕く明治九年木戸孝允が杉孫七郎に贈れるものなり）

二七　土方久元宛書翰　明治九年二月九日

亂筆御推覽被下候ゑ必々御投火奉願候

先以御清適奉賀候さては卒然申上候も甚以如何敷御坐候儀老兄にも從來御同樣に御承知被爲在候御事に付内々御尋仕見申候三條公逐々御負債も有之候由にゑ世上紛々風說も有之乍陰も御氣の毒に奉存居候事に御坐候其に付候ゑは元より家職其任に當り候もの其責は難免儀に御坐候處此度

（三條は三條實美）

森寺とふ歟辭職被命候歟〻よし實に何歟罪件御坐候へは實にいたし方無之候得共只々同人〻私借などにゑ公然不可恥〻條理有之候事に御坐候へは可憐次第に御坐候是等も弟等何歟と此事に而已口外いたし候もいかゝと愚考仕候へ共樣子不相分儀に付極々密に相窺申候間御承知も御坐候はゝ御洩らし可被下候自然も同人〻私借と混雜事どもに御坐候得は氣〻毒なるものに御坐候尤私情を以論じ候ときは三條家〻負債も其のかり丈けは難免事とは奉存候得共一應相窺度奉呈候草々頓首

二月九日　　孝允

（森寺は森寺常德）

（久元は土方久元）

久元先生御内密

二八　木梨信一宛書翰　明治九年二月十三日

亂筆高恕別封乍御面倒御屆奉願候

先以御清適奉賀候

○關口も過日出立不日着縣と遙察仕候佐々木が一先先きへ歸縣の都合に御座候間人も直に御承知と奉存候（關口は關口隆吉）（佐々木は佐々木男也）

○東京も都合無事に御座候朝鮮よりの報は今に何たる事も無之只々相待居候

○磯右衞門なる者昨夜來着貳拾圓拜借被仰付候由難有奉存候幸便に御送り可申上候毎々御手數奉恐入候（磯右衞門は原田磯右衞門）

○矢富なるものへ申越置候樣云々承知則申越置候（矢富は矢富五郎七）

○何卒當春はどうぞ御出京奉待候關口へも相談置申候

先は此段申上候其中御自愛專一に奉存候頓首

二月十三日

吉田へ奉願候脇目等之事松原藤雄歸便に可申越と存候（吉田は吉田右一）（梨花は木梨信一）

梨花老兄御内々　松菊

二九　土方久元宛書翰　明治九年二月十四日

先以御清適奉賀候過日は態々御答書御持せ難有拜誦仕候于時老兄にも已に御配意も被爲在候由小生も同人之儀に付別に何と申事も無御坐候得共癸亥已後之事も承知いたし居候間一時之事にゝ汚名を受け（是も當人之身より出候事に御座候へはいたし方も無之なれ共）再ひ人中へ顔出しも出來ぬ事にゝは氣の毒と相考頃日も御内々入御耳候次第に御坐候然處又々如別紙申越實に如此書中條公之御負債も眞に相片付候事に御坐候得は重疊之御事にゝ同人之内願意之邊も右樣之次第に御坐候得は無理ならさる儀と愚考仕候老兄如何被思食候哉小生におゐても別にいたし方無御坐候に付有之儘内密申上候間可然御料理相成事に御坐候はゝ御配慮申候何も老兄い細御承知之事に付内密無腹臓申上候儀に御坐候間只々御含までに奉願候先は爲其草々頓首（同人は森寺常德なをふ）（條公は三條實美）

二月十四日

亂筆御推覽被下候ゝ御投火奉願候